
魔王、結婚します

如月凌

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔王、結婚します

【Nコード】

N7876Q

【作者名】

如月凌

【あらすじ】

「結婚しようか」と迫る魔王陛下と「寝言は寝て言ってください」そんな魔王に召喚された魔女リーシアの物語。

登場人物

リーシア

魔女。変質した存在。

魔王に魔界に召喚され、結婚を迫られている。

記憶の一部が欠けており、追い立てられるようにそれを探している。
甘いものが好き。

ヴィセ

魔王。

美形らしい。

手先が器用で料理上手。

為政者としては有能。

戦闘能力はチート。

リーシアに結婚を申し込むが、そこには恋愛感情はない？
実は次男。

レフ

魔王側近。文官のトップ。

不器用。ゼロの親友でもある。

ライ

魔王側近。武官のトップ。

先々代魔王の息子。

ヴィセの剣の師でもある。

単独任務で度々城を空けている。

ゼロ

先代魔王。

ヴィセの父親。

少年の姿をしている。

もとは魔界最下層の生まれで戦災孤児。レフとはその頃からの付き合い。先々代魔王を殺害し、魔王と就任した。民からの人気は高かった。

アルフィナ

ゼロの妻。ヴィセの母親。

もとは人間界で勇者と呼ばれていた一族の後継者。

先々代魔王

狂王。魔法技術に優れており、悪戯に戦火を長引かせ拡げてそれを利用して人道外れた魔法研究を命じていた。魔法技術は以降向上したが、あらゆる問題を残した。

始まり（前書き）

はじめまして、です。

緩く 寛大な心でお付き合いしていたださい。

始まり

それは魔王の一言から始まった。

「よし、結婚しよう！」

誰と？

周囲の疑問を余所に偉大なる魔王陛下は一人の人間を召喚した。
その人間は、人間界で最強で最凶の魔女だった。

それは国王の一言から始まった。

「——と、いう訳で今晚から夜伽な」

どういう訳だ！

城に喚ばれた魔女は憤慨した。

ふざけるな。誰が貴様なんぞと！

ブチ切れた魔女は国王に呪いを掛けると、その場で転移門を開き逃亡した。

着いた先は魔界だった。

果たさなくてはならない約束があった。

『夢』のような願い。

それが何であったのかを彼女は『忘却』している。

始まり（後書き）

はじまってしまった。
頑張ります。

人間界には魔女がいた。

可憐な容姿に、甘い声。美少女な姿の魔女は、誕生日がくれば二百三十二歳になる。その姿を魔法で弄ったかと問われれば、答えは否。十六の時に肉体年齢を留めただけである。

魔女の名前は、リーシア。その彼女は今、魔界に来ていた。

「なんでだ!」

立て続けに起きる事態にリーシアは怒気を孕ませ、声を荒げる。

相手は魔界最高の権力を誇る魔王陛下である。

周りにいる魔王の側近達はただオロオロと二人の成り行きを見守ることしかできないでいる。

結婚する、そう宣言した魔王陛下。だが、相手に人間の、しかも魔女を選ぶとはぶっ飛んでいる。流石というか、何と言うか。

魔女に怒鳴られている魔王陛下はというと、さして内容を聞いてはいないのか、しれっとした顔をしているわけでそれがまた魔女を刺激する。

「いきなり呼び出して結婚を迫るな!」

ん?と魔王陛下は顔をあげて魔女をみる。

「なんだ、いきなりじゃなければ良いのか?」

では段階を踏もう。

「

「いらないし、しないから!」

「:何が不満なんだ?」

訳が分からないと、魔王陛下は顔をしかめる。

「は、話が通じない:」

リーシアは頭を抱える。未知の存在である男などかわりたくもないのだが、そうはいかない。

何しろ帰り方が分からないのだ。

ながく生きているリーシアだが魔界には来たことなどない。よって、

界を越える方法が分からないのだ。

「帰して」

「駄目だ」

「なんで」

「結婚した後、別居していたのでは困るだろう」

「しないって」

「それに帰る方法が分からないのだろう？」

うっ、返す言葉が見付からないリーシアにっこりと魔王陛下は笑う。

「部屋を宛てがおう。いくらでも滞在してくれ」

帰す気は無いしな、そのうち気が変わるだろうと、のったりと彼は言う。

リーシアは軽く殺意を覚えながら彼を睨みつける。

効果は無く、変わらずに

「ようこそ。魔界へ」

偉大なる魔王陛下はそう言い彼女を歓迎した。

「すみません。陛下が無理を…」

レフと名乗った魔王の側近が部屋を案内する。

リーシアは城に滞在することにはなったが、魔王と結婚する気などはない。

リーシアは、貴方では帰せないのかとレフに問うたが、主君に反することはできないと断られた。

やはり魔王を何とかするしかないようだとしてリーシアはがつくりとなだれた。

部屋はやたら豪華だった。質素に生活してきたリーシアは間違っではないかを確認したが、ここで間違いないと断言されてしまった。部屋のあちこちに魔法式が組み込まれているのを感じ取り、顔をしかめたリーシアにレフは慌てる。

どうやら軟禁するための拘束の魔法ではないらしい。部屋の維持の魔法だとレフはリーシアに説明した。どのようなものは、すぐに分かるだろうとも。

「ん？」

部屋にはもう一つ扉がついている。入って来た扉とは別の扉を指差し、

「あれは何処へ通じているの？」

レフを振り返るがさっと視線を逸らされた。

「いえ、あの…」

どもるレフに、嫌な予感。

すたすたと扉に近づき確認してみるが、なんの変哲もない扉である。開けようとノブに手を掛けようとした瞬間、勢い良く扉は開いた。

「この扉は俺の部屋に通じているのだ。夜ばいは大歓迎するぞ、リーシア」

開いた口が閉まらない。

「：陛下、やはりあんまりかと思うのですが：」

後ろでレフが何か咎めているようだがリーシアはそんなコトどうだってよかった。

パチパチと制御しきれなくなった魔力が流れでている。

「なんだ反応がないな。どうし：」

続く言葉は空気に消える。「：死ね」

彼女は流れでていた魔力で構成を組み込むと、一気に魔法を展開させる。破壊を司る魔法は部屋を飲み込みレフを吹き飛ばしながら、魔王へと向かう。

最大出力で放たれた魔法はしかし、魔王に衝突する瞬間掻き消えてしまった。

「本当、死んで下さい」

更に、もう一度魔力の奔流が魔王を襲う。

「んなっ、勘弁してください！」

一度目のリーシアの魔法に巻き添えをくらったレフは、壁に減り込みながらも必死に抵抗している。魔王はちよいと身構えたのみで、リーシアの目の前に突っ立ったままである。

（なんで!?!）

「愛の力だ」

「心の叫びにまで突っ込まないで下さいよ」

一気に脱力するリーシア。常識にいる魔王はそんなリーシアを愉しように眺める。結局、人格がどうあれ魔王は強いのである。

「まあ、この部屋は王妃の為の部屋ではあるが俺は基本、隣の部屋にはいないしな。安心していい。人間が滞在するにはこの部屋が一番適しているんだ。鍵もこちらの部屋に付いている。嫌がっている女性をどうこうするつもりはないしな」

「最初にそう説明して欲しかったです」

「：レフ」

魔王の呼びかけに壁にめり込んでいたレフがびくりと反応する。

「私は最初の理由しか聞かされていません」

「まあ、アレもホントだからな」

「しませんから」

夜ばいなんてしない。他人と触れ合うことなんてしない。誰かを愛するなんて自分には出来ない。

（だって私は…）

「変質…か？」

はっとリーシアは顔を上げる。声は出していなかったはずだ。

真面目な顔をした魔王がリーシアを真っ直ぐ見詰めている。

「どうして…？」

茫然とするリーシア。

返答は得られず、魔王は背を向け扉の向かうへと姿を消す。彼は大事な事を話していない。飄々としたあの態度は何かを隠す為なのではないだろうか。だとしたら何を？

視界の隅に映るレフはなにか複雑そうな顔をする。

ボロボロになった部屋に『維持』の魔法式が働く。

急速に綺麗になってゆく部屋でリーシアは開かない扉を眺めていた。

3 (前書き)

魔王とレフ。

「…おかしいだろう」

珍妙な顔をしながら呟く魔王陛下。手元には書類の山。

「何か問題でもありましたか？」

レフは陛下が目の前書類について言ったのではないことを知りながら問い掛ける。

「…いやな、何と言うかタイトルが『魔王、結婚します』なのに出来ていないからな。これでは読み手がガツカリだろう」

「なんの事です？」

意味が分からないレフ。先代より仕えているレフはこの王が少年だったところから、否、赤ん坊だったところからの付き合いである。

先代より癖が強いこの主は、一体何を考えているのか読めた試しがない。突然突拍子もないことをしでかすのだ。いつストレスでハゲるのかを考えるとレフは胃のあたりがキュウっと締め付けられる。

（幼い頃は可愛かったのですが）

『レフー、レフー遊んでー！』

『殿下、分かりましたから魔法は止めてください』

（目を閉じると思います。幼い頃の陛下は私の後ろをテコテコとくっついて離れませんでした。魔法を使っても己の欲望を叶えようとするのですから…。無邪気なあの笑顔が懐かしいです。）

「…：…フ、レ…：…、レフ、還って来い！」

はっとする。

「なんですか、陛下。美しい思い出くらいトリップさせておいてください」

「うるさい、俺の心理描写が描かれないのだ。お前一人狡いだろう」
「それはお自身の性格故の事ですから私は知りませんよ。巻き込ま

ないで下さい。そもそも描かれないとはなんのことですか」

「しかも今回、リーシアは出て来ん。詰まらんぞ」

「リーシア様はお休み中です。人間界はいま夜ですからお疲れでしょう」

「魔界は昼だがな」

「そうです。しっかり働いてください、陛下」

不満たらたなら魔王はグチグチでだらだらである。リーシアがこの場にいないことなど当然ではないか。国を左右する書類だらけのこの部屋は立ち入りが厳しく制限されている。

「…気にはなっていたのだが」

「？」

「いつ俺の名前がでるのだ？」

「…？ 御自身の名前を忘れたのですか？」

陛下

「どんな大ボケなんだ、それは」
がつくしとうなだれる。

「誰も名を呼んでくれないとは、辛いものだな。寂しいぞこれは」

「魔王陛下はお一人しか居ないのでから、名前なんて呼ぶ必要などないでしょう。陛下は、『陛下』です」

なんだっていいじゃないですか、そういうレフに

「……………お前、俺の名前呼んだことあったか？」

と魔王。

妙な沈黙と共に返ってきた返答は

「そういえば、無いですね」

だった。

遠くを見詰める魔王陛下、その背中には哀愁が漂っていた。

「……………名前の話題に触れたにもかかわらず、放置か？」
ぼそりと呟く魔王の声は微かに震えていたとレフは言う。

3 (後書き)

しばらくシリアスにはならない、です。

4 (前書き)

レフとライ

今日も魔界は平和である。

魔界の住人は基本のつたりとしている。それは、彼等が長生きなことも関係している。歳をとれば、なんだかんだいっても丸くなるものなのだ。

先代魔王の時代には天界との戦争もあったらしいが、その天界も今は消失してしまっている。敵対する『界』などもないのだ。

危機感を感じない魔界の住人は平和ボケをしており、ゆっくりとした時間の流れを生きている。

そんな中、魔王陛下の護衛をしている武官はトラブルを起こしたがる陛下に日々泣かされている。

そもそも、魔王陛下を物理的に傷付けることなどほぼ不可能なのだ。魔王は、絶対的な力そのものである。護衛など必要としていない。

「形式ってめんどいなー。いっそ、人員整理しちゃわないか？」

護衛廃止！ 護衛にまわした部下が可哀相でならねえ」

「口を慎みなさい、ライ。陛下の護衛は必要です。：監視の役割もあるのですから。貴方の部下には仕事として割り切ってもらいなさい」

「わーってるって。先代みたいに家出されてたんじゃ大変だかな」

「：あの方も困ったものでしたからね。しかし、ライ。貴方何故此処にいるのですか。貴方にはリーシア様の護衛を頼んでいたはずでしょう？」

「追い出されたんだよ。陛下にな。陛下の護衛も追い払われてたしなー」

「陛下、ですか。まあ予想の範囲内ですが」

「レフだって似たようなもんじゃねえか」

「ふふっ、確かに。私もよいように追い出されたものです。まあ、私としては陛下の恋愛を応援するつもりですから、良いのです」

魔王の護衛は過去、先代の悪癖から付くようになった。

先代の悪癖、それは『家出』である。つまり護衛という名の監視なわけだ。

「まあ、駆け落ちとかの心配はないわけだし？　魔女さんが城に留まってる以上、陛下は意地でも城からでねーだろ」

「誰も反対してませんからね。駆け落ちの理由などないでしょう。障害なんてあるようでないはずですし」

「あとは魔女さんの気持ちだけだろ？　あー、でも先は長いんじゃない？」

「まあ、気長に行きましょう。それよりもライ、暇があるならば軍に顔だしてきなさい。一応、トップなのですから」

「うーわー。だりい」

「そういいながらもライは立ち上がる。

「ん？　魔女さんの護衛はどうすんだ？」

「今日は陛下がべったりですよ」

レフの手元には数日分の仕事の山が出来ている。ほぼ終わっているものばかりだ。

寝ないで仕事をこなしていた陛下をレフは止める気などない。

（頑張っていましたからね。まあよいでしょう。今日くらいは陛下の自由にさせましょう）

「ふーん。しゃーねーな。ちったあ、下を鍛えてやるかあ」

「ええ。そうしてくださいああ、でもほどほどにしてくださいよ。

前回は演習場大破で修繕費用がかなりいきましたから」

「わーってるって」

聞いているのか、聞いていないのか分からないライが生返事で出て行くと、部屋に残ったレフは仕事を再開させる。

少しして、爆発音が聞こえてくるとレフは一人ため息をついた。

その爆発音の原因は、と考える前に、とりあえず修繕の手配を始めたのだった。

後日、ライ
俺じゃねえし、
魔女さんが暴れてたんだし

5 (前書き)

ライと魔女

「魔女さん、許可もぎ取ってきたぜー」

それを聞いた魔女、リーシアは笑顔になる。

「有り難うございます。本当に助かります」

「いいって、やることなくてヒマだろ？」

リーシアは護衛としてきた、この武官ライのことは嫌いではない。さっぱりとした性格なライのことを最初こそ警戒していたものの、直ぐに打ち解け今に至る。

「そうですね。研究途中だった資料も魔法書も向こうに置いて来てしまいましたから、やることはないですね。とてもヒマです」

「帰らしてやりたいのは山々なんだがなあ。俺の一存じゃできねえんだ。わりいな、魔女さん」

「アレをなんとかしないといけないのは、初日で理解しましたから謝らなくていいです。悪いのはアレですから」

本来なら不敬罪もののアレ呼ばわりだが、リーシアはこの界の者ではない。

自分を誘拐した奴のことなどを敬う事など不可能である。

「やっぱり仲悪いんだな。先日也大分やらかしていたみたいだしな」ライはレフの急に増えてしまった仕事を思い出し、苦笑いをする。

「レフも俺みたいの下に任せてれば楽なのになあ。毎日ガリガリ机にかじりついてやがるし」

「それが出来ない人もいますから。図書室までの案内頼めますか？」
「おうっ」と気前良くライは返事をする。

暇なリーシアは図書室の閲覧を希望したのだ。城の中には第三図書まであるが、今回希望したのは第二図書である。第三図書は一般開放されており、気軽に城に入れるとあって市民の人気は高い。第三図書の場所はちょっと特殊な作りになっていて、城の中から直接は行けない。一度『外』に出てからではないと入れない造りになって

いる。城内にいるならば、許可をとって第二図書に行けるようにしておけば後々楽だと、ライは許可をもぎ取りに行ったのだった。

「ホント魔女さんベンキョ熱心だな。俺、文章苦手。立場上いろいろ書類仕事も多いんだけど毎日ツラくって」

「勉強も研究も好きなんですよ。趣味みたいなものです」

「そっか。なんか必要なものあんなら言ってくれな。それくらいは用意すっから」

「有り難いです」

魔王の側近である二人、レフとライは意外に常識を兼ね備えており、特にライはリーシアに協力的だ。

「ライ」

（げっ）

第二図書室を目前にリーシアが最も遭いたくない『もの』に遭遇してしまった。その背後にはレフもいる。

「陛下」

「狡いぞ。俺の前ではリーシアはいつも怒っているというのに」

「どうやら和気あいあいとしていた所を見られていたらしい。」

「それは陛下が魔女さんを怒らすからじゃねえスか」

「最初の召喚からアレでしたので最悪に嫌われていますし」

魔王の背後にいたレフが口を出す。

「陛下は引くことも覚えなきゃダメだしな」

「必要な事を何一つ話していないあたりも相手をいらつかせる要因ですしね」

「だなー」

うぐぐ、と魔王は二の句が次げない。

ライとレフの言葉にリーシアは『そうだそうだ』と応援する。

「お前等はどちらの味方なんだ!？」

「「立場上陛下の」」

即答で返された言葉は棒読みである。

そのやり取りにリーシアは思わず吹き出して笑ってしまう。

わかりかし今日も、魔界は平和である。

性格が破綻しているが、一応は偉大なる『魔王陛下』。

そんな彼は、木の股から産まれた訳ではなく、とりあえずは親兄弟もいるわけである。

だから、彼にも両親から『名前』を与えられているのである。

ただ、その『名前』を呼ぶような人間は城の中にはいない。それどころか、そもそもの問題で『名前』を知る人間が城の中にいないのだ。

側近であるライとレフ。付き合いは長く、魔王が赤ん坊だったところから付き従っているが、名前を呼んだことは一度もない。ぶっちゃけよう。

「忘れちゃったんだよなあ」

「ですね。何百年も生きていると、流石に昔のことなど記憶にないですから」

「それは、凄いです。あ、でも書類に署名とかしないんですか？」

「名前は記入しない形式なんだよ、魔女さん」

「何代目魔王と記入します。使用しているインクが特殊なもので、それ自体に魔法が掛かるんですよ」

ある日の午後、リーシアはライとレフをお茶に誘った。

自然彼等の話題は『魔王陛下について』に行き着いた。このメンバーだと当然なことと言えるだろう。

「アレは私の名前を知っておおっぴらに呼んでいましたから、自己紹介のタイミングが無くなって、私も聞きそびれてしまったんですよ。頭にキてそれどころではありませんでしたし」

「だよなあ」

「凄い剣幕で陛下とやり合っていましたからね。周りでハラハラしていましたよ」

「でも、魔女さん。陛下の名前なんて知ってどうすんだ？ そんな

なん知らなくてもいいだろ」

「ライ、不敬ですよ」

なんてと称される魔王の本名。確かに知らなくても、問題はないだろう。数多に人はいても、魔王と称される人物は魔界に唯一人。臣下は陛下と呼べば事足りる。リーシアもアレでも何でも呼べばいいのだ。

「あの人、いまさら自己紹介しそうにないじゃないですか。知りたいうことは何一つはぐらかして言いそうにないです。それって…狡いです」

突如、結婚すると言った魔王。

何故、選んだのがリーシアだったのか。

彼はそれすらも明かさない。

（それに、アレは私が魔女である理由さえも知っている）

「え、なんだあ？　魔女さん陛下に興味もってくれたのか」

「助かります」

その言葉にリーシアは慌てる。

「違うよ！」

その慌てっぷりにレフがクスクスと笑う。

「でも、陛下は優良物件だと思いますよ。権力も地位も力も持っています」

「顔だっていいしな。多分、一途に想ってくれると思うぜ」

「そのかわりに性格がおかしいですよ」

付き合いきれないですよ。リーシアがぼそりと呟く。

「そうですね。リーシア様、夜に中庭に行ってみてください」

ああ、とライは思う。

「いいもん見れるぜ？」

話しの脈絡がないと思いつつも、リーシアはうなづく。

「――にしても、このお茶菓子美味しいですね」

「
「
（餌付け？）
」
」

7 (前書き)

邂逅

空を知らず、光を知らず、ただ闇の中でもがいていた。それがどのくらい長い間だったのかは知らない。

自分が自分でなくなる間だったのだけは確かだった。何も知らなかった子供は、全てを憎んだ。

世界を、人間を、自分を。

そして、子供は魔女になった。

「…最悪っ」

額に玉を作っている汗を手の平で拭うとじっとりと濡れた。借りてきた本は開きばなしで跡が残ってしまったている。

カーテンの閉められていない窓の向こう側、外は暗くなっていた。青白い月光が窓から部屋へ差し込んでおり、じっとりと濡れた手の平をぼんやりと照らした。

真円を描いている月は、人間界のそれと変わる事なく、空に浮かんでいる。

「…なんて憎たらしい」

いつの間にか寝てしまっていたらしい。リーシアは濡れて冷たくなっている手をぎゅっと握りしめた。

嫌な夢だった。

忘れることなどない、改めて見せられる程のものでもない。

（だって先刻の出来事のように思い出せる）

忌ま忌ましい、過去。

（今夜は、静かですね）

不思議な位に。

『夜に中庭に行ってみてください』
レフの言葉を思い出す。

（そうですね。もう眠れなそうですし、散歩でもしてみるのも良い

ですね)

城は静かだった。

普段は誰かかしら長い廊下を歩き回っている姿を見掛けるのに、誰もいなかった。警護をしている武官もいない。リーシアの足音だけが回廊に響いた。

結局、中庭まで誰とも会う事なく出て来る。

(…? だれかいる?)

月明かりが誰か人の姿を照らす。

誰かが剣を一心に振るっている。青白い月光が銀色の刃を照らし、美しく軌跡を描く。武官の誰かが鍛練でもしているのかとリーシアは近付く。

瞬間、

「誰だ」

静かで冷徹な男の声。

声と共にリーシアに刃が突き付けられる。

びりびりと肌に感じるソレは純粹な殺意だ。

殺される…

男の瞳は紅く、血に飢えたようにリーシアを見据えた。

リーシアは動けない。

「…リーシア？」

男は紅い目を丸くし、慌てたように剣を下げた。

「すまなかった。でも、どうしたんだ、こんな時間に。眠れないのか？」

月明かりに照らされたその男は、『魔王陛下』その人。しかし、普段彼から感じる『彼らしさ』がリーシアには感じられない。

「…はい、散歩でもと思って」

「そうか…」

静かな声なのは先刻と変わらない。だが、先刻向けられた殺意などとは感じられず、打って変わり穏やかな声で魔王は話す。そう、いつ

もよりずっと。

「よかったら少し話さないか？」

リーシアは静かにうなづく。

「で、どうしたんだ？　顔色が悪い。嫌な夢でも見たか？」

「よく、分かりましたね」

その通りですよ、とリーシアは言う。彼はリーシアの頭をくしゃつと撫でた。

リーシアは他人に一定以上近寄られることを嫌う。触られるのに嫌悪感を抱くはずなのに、不思議心地よさを感じ驚く。

「よっぽど怖かったのか、魔力が乱れているな」

「怖い、とは違います。きっと、」

それに

「さっきの貴方のほうがよっぽど怖かったですよ」

剥き出しの殺意。全てを恐怖に陥れる『魔王』。

忘れてはいけない。

彼は、『魔王』なのだ。

「いや、本当にすまなかったな」

その態度にリーシアはクスクスと笑う。

「…？　なんだ？」

「いえ、貴方が素直なのは可笑しいです」

「失礼だな」

「本当のことじゃないですか。考えてみれば、貴方とこうしてゆっくり話すのは初めてですね」

「そうか？　今までも二人きりで話すことはあったろう」

「でも、いつも会話が成立してはいなかったじゃないですか」

相手に苛立ちを感じ怒鳴ることしかなかった、リーシア。

我が道を歩みつづける魔王。

相手に押し付けようとするだけで、受け入れることが出来なかった。しようとするしなかった。お互いがお互いに一方通行。

それは、会話ですらない。

「きいてもいいですか」

「なにをだ？」

知りたいことは何一つはぐらかし、教えてくれない。
今ならば、きけるのではないか。

そんな希望。

だから、リーシアは問う。『何故』を。

少しでも、真実を掴みたくて。

その身に纏わり付く、悪夢の残滓を振り払うかのように。
誰かを感じていたい。

それが、例え『魔王』だとしても。

魔界という世界の王。

人間界で伝えられる『絶対的な悪』である彼は、今穏やかな表情をしてリーシアの前に立っている。

「なにを知りたいんだ、リーシア」

魔王はリーシアが話し出すのを待っている。

（この人は本当に『魔王』？）

そう思うのは無理もないことだろう。人間界で伝えられるどの魔王像とも掛け離れすぎ、今まで過ごしていた彼とも纏う雰囲気が違う。

今までの彼には、話しを通じない、何度もそう思った。

そのたびに、憤り、怒りの矛先をぶつけたのだから。

「：リーシア？」

答えないリーシアに魔王は訝しむ。こうしてリーシアに発言権を与えることに戸惑いながら、リーシアはゆっくりと整理しながら問うた。

「きかなくてはと思ってました。どうして私が『変質』だと知っているんです？」

それはリーシアにとって忌むべき事柄。リーシアが魔女である理由そのもの。忘れられない、身に刻まれた悪夢。

「：人間は魔法を使えない。確かに記録では過去存在していたようだが、本来は有り得ない事だ」

人が魔法を使うためには、構成を刻まれた魔石が必要となる。それを魔法石という。

しかし、リーシアはそれを必要とせず、魔法を使う。それが答えだ。

「魂の基本構造が違う魔界の連中や消失した天界の連中なら話は別だがお前は人間界生まれ。ならそれしかないだろう。人間界では変

質を知る奴はもうないし、研究記録も失っているが、俺達は少々長生きだからな。それだけに知識を得る機会が多い。突き詰めていけば、答えはでる」

まあ、だがなど、魔王は間を置く。リーシアは続く言葉を待つ。

「『変質』を知ってる奴は魔界でも多くはない。気にしなくていいぞ」

「だから呼んだんですか？私が『変質』だから」

「何言ってるんだ？理由なら最初にいったろう。結婚しよう、と」

「冗談にしか聞こえないんですよ。貴方のそれは」

真剣味の足りない魔王のプロポーズにリーシアは応えることなどできない。最初、ただ怒りが込み上げるだけのそれは、今聞いていると空虚で意味を成していないようにさえ思う。

「いや、大まじめなんだがな」

その言葉すら透明感があり、現実味を帯びていない。

そう、最初から…。

「結婚はしませんよ」

手を伸ばせば届く距離、そんな彼は遠い。

体ではなく、心が。

「気長にいくさ。今は、此処にいてくれるだけでいい」

リーシアは今の言葉に何かを感じる。

顔は笑っているが、声は真面目だ。微かに混じるのは彼の真実。

それに気が付かないリーシアではない。

「帰る方法が分からないですからね。帰してくれる気もないのによく言いますよ」

リーシアが呆れたふりをしながら言う。

自然と普段より口調は優しくなるのは何か結婚以外に理由があるのだろうかと思ひ直したからだ。

結婚に対しては『冗談』にしか聞こえないほど真剣さが感じられなかった。此処にいて欲しいという彼の言葉だけは、どこか切羽詰まったような何かがあった。

でも、リーシアは『気付かない』ことにする。

「貴方、普段からそういう態度とってたら、私ももう少し見る目違いますよ」

魔王としても、一人の人間としても、いつもよりずっと『らしさ』を見せている。

「こういうのは、たまにだからいいんだ。いつもそうならギャップ萌えがないだろ」

前言撤回、いつもと変わらないかもしれない。

長くは続かさせてくれない彼のシリアスモードに、溜息をつくりーシア。

「今日はもう、いいです。部屋に戻ります。貴方は…」

ふと、思う。

「うん？」

「部屋に戻らないんですか？」

隣の部屋の主である彼は、宣言したように寝室にいた所を見ない。いつ寝ているのだろうか、疑いもする。

「まだ、これから仕事があるからな。なんだ、まだ悪夢がこわいのか」

「ち、違いますよ。少し、心配しただけです。小指の先ほどには、ですけど」

魔王は静かな声でリーシアに言う。

「大丈夫だ、リーシア。今夜はもう、悪夢は見ない。安心して寝ていい」

彼の表情は逆光でよくは見えなかった。

リーシアはお休みと言いつつ、振り返ることなくその場を離れる。後には一人、魔王が佇んでいるだけである。

「大丈夫だ、リーシア。もう、悪夢が君を蝕むことはない…」

彼は呟き、闇は濃くなる。

見上げれば、月を厚い雲が覆い隠していた。

例えこれが『夢』の中の邂逅だとしても。

君を守りたいと誓ったのだけは『真実』だから。

まだ、何も知らなくていい。

『悪夢』が君を捕らえることが無いように。

どんな道化を演じて、君に笑顔を与えたいから。
ただ、もう少し待っていてほしい。

8 (後書き)

魔王は結婚できるのか？
知りません。
すみません。

タイトル詐欺になりそうなくらいに 迷走してゆきます。

「…期待したんだがな」

魔界の偉大な王は、朝から倦怠感を漂わせている。

容姿が非常に整っている彼は、そのアンニュイさが色気を程よく醸し出しているのだが、そんなことはどうでもいいことである。

少なくとも、今この時は。

「陛下、お願いですからその無駄な色気の垂れ流しはお止めください」

咎めるのはレフである。

「レフ、朝から五月蠅いぞ。少し静かに頼む」

艶やかな美声にレフは怯みそうになるが、負けてはいけない。

「本日ですが、先代がお見えになるそうです」

「…用事は何だ？」

抑揚のない返事に、レフは構えながら話す。

「第二図書室に調べ物だそうです」

その場所には

「……リーシアは今日も図書室か？」

「はい。本日、ライは視察で出ていますので城内の警備を多少強化してあります。リーシア様の行動範囲には防衛魔法を張っておきましたから、問題はありません」

ライも四六時中護衛をしている訳ではない。彼は一応には、それなりに偉い地位に就いているのだから、仕事もそれなりにはある。

そんな彼が何故リーシアに付いていたのかといわれれば、リーシア自身の特異な立場の為に外ならない。

リーシアは魔王陛下の客人として城に滞在している。

だが、彼女は人間界の存在。他の界のことをよく思っていない魔界の住民もいるのである。

そう、魔界は平和であるとはいっても、魔王に仇なす輩が無い訳で

はないし、争いがなかったという訳でもない。

それがリーシアに及ばないという保証は何処にも無いのだ。

魔王を屈服させるための人質として狙われるかもしれない。

魔王にとっては嫁候補。リーシアは有り得ないといっているが。

絶好のターゲットになる可能性もあるのだ。

魔王という地位というのは、なろうと思っただけなれるものではない。

（魔王は強さで選ばれる）

だが、万が一ということもあるわけだ。

中には奇特な変わり者というのもあるのである。もしくは、我こそ最強と自負するような頭の不憫な者か。

そして、もうひとつ。

リーシア自身が、魔界の害となる場合だ。

人間界の『人間』は魔界の者を嫌う。

リーシアが攻撃してこないとは限らない。

その為の監視でもある。

魔王はリーシアをどうこうすることを望んでいないが、彼には民を守る義務がある。

「なあ、レフ」

「なんですか、陛下」

「この場合はあれか？　リーシアを恋人として紹介するべきか？」

先代とは詰まるところ、現・魔王の父親である。

「それはリーシア様が怒ると思いますよ、陛下。」

陛下はリーシア様にお名前すら呼ばれたことがないのですから。まずはリーシア様に自己紹介からやり直しをば、してください。

リーシア様は陛下のお名前をご存知無いのですから」

いつになく強気なレフ。

「それなんだがな。リーシアは俺の名などどうでもいいんじゃないかと思えてな」

「何故です？」

「昨晚、ききたいことがあるというのでな、期待していたんだがそ

の話題には触れないで終了した」

「冒頭の言葉はそれでしたか（夜にお会いしたんですね、リーシア様）」

「ここまでくると、名乗ったら負けのような気がするな」

「陛下：（そこは負けておいてよいですよ）」

レフは「もう、勝手にしてください」と投げやりに返すと「おまえ、父上が来ているときは強気なのな」と魔王はぼやくのだった。

「やはり親への紹介は既成事実を作ってからだな」

「（リーシア様が危険だ!）」

「（取れないですね…）」

基本リーシアは身長がとても低い。まだまだ発育が望める年齢（本人談）で成長を留めたために、小柄で何処とはいえないが薄い（幸は薄くない筈と、やはり本人談）。

図書の本棚は高めに作られているために毎回苦勞しているのだ（決して、リーシアがちっさすぎるわけではない、ちよいと小柄なだけだと、本人談）。そのたびにライが取ってくれていたのだが、本日は不在である。

魔法を使えば楽なのだが、この部屋では使えないのだ。

蔵書には劣化防止の魔法が掛けてあるのだが、火には弱い。紙なのだから当然ではある。

劣化防止とはいっても魔法の影響を防ぐものではないということである。

そのため、重要施設では魔法は基本禁止されているのだ。

リーシアもそれは理解している。

「（踏み台でも借りてきますかね）」

踵を返そうとすると、

「この本でいいの？」

横からにゅつと手が伸びてすつと目の前に差し出される。

「あ、はい。ありがとうございます」

「うん、どう致しまして。……？」

本を受け取ったリーシアは目の前にいる男を凝視した。

初めて見る顔である。

だが、誰かに似ている。

思い出せない。

「どうかしたの？」

「いえ、誰かに似ているような気がしたんですが…」 「なに？」

ナンパ？」

「違うよ！」

思わず声を荒げたリーシアに、男は簡単に知ってるよと返した。

「うん、でも図書室では静かにしよう」

もつともである。

「それ、」

男はリーシアの持っている本を指す。

先代魔王時代の記録らしいのだが、

「中身はただのレフの日記だよ」

「え、なんでそんなものあるんですか」

「一応、公式の記録として提出されたものだからね。というか、この棚は全部レフの日記置場みたいになってるから…。歴史が知りたいのならもう一つ向こうの棚にあるよ」

リーシアが欲しがっているのは『ある知識』である。あと忘れてはいけない、帰り方と。

私事だらけの日記が読みたい訳ではない。
だが、

「歴史というか何と言うか、知りたいのはもっと別の事なんですけどね。宛てがないんですよ」

「うん、何が知りたいの？人間界への行き来の仕方？」

「あれ？ 私、人間界から来たと言いましたっけ」

それとも、見ただけで分かるものなのだろうか。

人間界の人間も魔界の住民も外見は変わらないというのに。

「まあ、城の中では有名人だからね。毎日、魔王と喧嘩しているらしいし。知らない方がおかしいくらいだと思う」
ごもつとも。

「帰りたいのなら、送ろうか？」

しれつと言い放つ男に、リーシアは驚く。

「そんなことして、貴方は大丈夫なんですか？」

「うん、僕は咎められないだろうけどね」

そう言う男に、確かに彼は咎めを受けないのだろうが。

リーシアは頭を振る。

「貴方以外の誰かが責任を負うのでしょうか？ それでは駄目ですよ」

一人、リーシアを呼び出した本人が承諾すればいいだけの話しなのだ。

確かに帰りたところではあるのだが。

そのために、誰かが犠牲になるのは避けたいところである。

「君がそれでいいなら、僕は手を出さないよ。いや、違うかな。手を『出せない』だ」

一文字違っただけで意味は違ってくる。彼にとっては大差があるのだろう。

リーシアには同じようにしか思えなかった。

「僕は『ゼロ』。困ったことがあったら相談に乗るよ」

彼、『ゼロ』はそう言い、リーシアに手を差し延べた。

リーシアがその手を重ねるとゼロは軽く握り返す。

ただそれだけの行為が、リーシアには嬉しかった。

その手の平の温かさが、ずっと焦がれていたものと酷似している。でも、リーシアは思い出せない。

その記憶は、『ない』ものだから。

少し前の事である。

「やはり気になるな。行ってこよう」

ガタリと椅子を鳴らして立ち上がったのは、城の主である魔王である。

近くで黙々と書類整理をしていたレフは溜息を一度漏らしたが、咎めることをしなかった。

そのままスタコラと部屋をでてゆく主を一瞥しただけである。

リーシアは握り返された掌にまだゼロの熱が残っているのを感じ、頬を薔薇色に染めた。

「何をしてるんだ」

不意に聞こえた声は怒気を孕ませ、大気を震わせた。

いつ来たのか、そこに居たのは魔王、その人だった。

彼は無表情で、まるで能面でも顔に貼付けているのではないかというほどだ。

数歩離れた所に立って近寄ってこようとはしない。

リーシアはゼロから一步下がる。

先刻高ぶっていた熱は急速に下がってしまった。

それどころか、寒いくらいに冷気を感じる。

浮気を恋人に咎められているようだ、一瞬リーシアは考えたが、そんな事実はない。だから、咎められる謂れはない。……筈である。そんな彼女に対して、ゼロは悪びれもせずに「やあ」と片手を挙げて魔王に返した。

空気を読んでいないのか、それとも読んでいても無視しているのか、なんとも呑気なものである。

「久し振りだね、ヴィー。大丈夫、彼女には何もしていないから怒

る必要はないよ？」

「……父上、それ（ヴィー）は幼名なんだが」
あくまでもマイペースなゼロにヴィーと呼ばれた魔王は毒気を抜かれてしまう。

声には怒気を孕ませてはいない。

ただ、あるのは呆れである。

「知ってるよ。僕が君の名前を考えたんだからね」

ポカンとしていたリーシアはふっと、正気を取り戻した。

「父上！？ 親子！？

——っていか名前あったんですか！？ 私てつきり、もう、な

いんだと思ってましたよ！」

言葉の意味を理解し始めたリーシアは、驚きを隠せない。

「うん、呼ぶ人間がいらないからね。無くていいくらいだ」

「それは流石に酷いと思うぞ！」

騒ぐ魔王を軽くスルーしながらゼロはリーシアに向き合う。

「さて、『リーシア』さん。話はレフに聞いたよ。大変だったね。息子が迷惑をかけていたようで申し訳ない」

「！？（父親というから輪をかけて非常識この上ないのかもと思っ
たのに普通にいい人！！？）」

「……涙目だぞ、リーシア」

「うん、なんとなく解った。本当に大変だったんだね。あとで話し
聞いてあげるよ。ヴィーは説教してあげるからね」

「いらん」

「是非お願いします！」

「うん、じゃあお茶でもしながらにしようか。ヴィーは戻って仕事
してるんだよ。レフが今頃一人泣いているだろうからね」

わかったね、そう言ったゼロの周囲は若干空気の温度が下がったと
いう。

「というか、いい加減幼名で呼ばないで貰いたいのだが」

「なら、まずはリーシアに自己紹介だね」

「え、要りませんよ。呼ぶ機会は無いでしょから」

「ヴィセだ！ 扱いが酷いと思うぞ！？」

「うん、ヴィー、静かにしよう。此処は図書室だからね」

12 (前書き)

ある日の会話

「貴方は『うん、』が口癖なんですか」

「あー、そうだね。他人の話しを聞く役目みたいになっていたから、相槌を打つのが癖なんだよ。――というより、いつの間にかなっていたというのが正解だろうけれど…」

「成る程。では息子が話しを聞かない。会話にならない。横暴で、最悪な俺様なゴーイングマイウェイな理由は？」

「あはは。あれはそっくりだよ。若い頃の僕に」

「想像がつかないですが……」

「うん、レフにでも聞いてみればいいよ。多分、喜々として話してくれるだろうから。三日ぐらいは覚悟しなくちゃいけないけれどもね。途中から泣き出すけど、それでいいなら」

「………いえ、それはやめときます」

ある日のリーシアとゼロ。

「…本当に親子ですか？」

「なんだ？」

「貴方とゼロは本当に血が繋がっているんですか？」

「…どういう意味だ？」

「いえ、あまりにも似ていないもので」

「何をどうとってそう思ったかは知らんが、事実だぞ。ライがよく言っている。父親の若い頃の無茶ぶりがそっくりだと」

「な、泣きながら話します？」

「ああ、なんだか知らんが泣き出すな」

「………。あの方も、無茶苦茶だったのか」

ある日のヴィセとリーシア。

「さて、リーシア。そろそろ結婚しよう。式はいつにする？」

「……寝ぼけているんですか？　それとも、頭がイッてしまっているんですか？　一度……いえ、二度くらい死なないと治らなそうですね。手伝ってあげますから、生まれ変わりますよう？」

抑揚のない声で、その台詞は物凄い早口で行われた。

そして、放たれた魔法は魔王を傷付けることは出来なかったが城の防御魔法を突き破り、一区画を大破させることとなった。

因みに怪我人は奇跡的にもレフ一人である。

「随分、風の通りが良くなったね」

崩れた城の一角を眺めながら、ゼロは瓦礫を片すように人をよぶ。

レフは、傷だけは魔法で治癒したのだが、未だ目覚めない。

普段ならば、修繕の手配をレフが行ってくれるのだが。

「すみませんです」

「僕に謝られても筋が違う。その言葉はレフに言うように。」

あと、壊れたものは魔法でも直せないのだから大事にするべきだ。

この城は歴史的価値も高いしね」

「そうだぞ、リーシア。お前は攻撃的すぎる。何が気に入らんのか知らんがな、城その他を破壊しすぎだぞ！」

——ツツコミたい。

しかし、リーシアはツツコミを堪える。ツツコミついでに爆破魔法を発動させてしまいそうだからだ。先刻の今で、また破壊するわけにもいかない。

「……………」

ヴィー、リーシアさんが物凄い顔してる。面白がってからかうのは止めてくれる？　これ以上破壊されても困るし、僕は巻き添えは

御免だ」

さて、とゼロは二人を順に眺め、うんと頷く。

「コレ、二人で直すように。物は手配しておいたから」

「「は？」」

ポカンとした二人をおいてきぼりにして、ゼロは淡々と話し続ける。

「その間のヴィーの仕事は僕がしておくから心配しないでいいよ。

ああ、護衛と監視も付けるから逃げないように。二人でやるんだよ。手伝わせないようにね。じゃあ、ちゃんとやるんだよ」

そのまま立ち去ろうとするゼロ。そこでようやく、リーシアは言葉の意味を理解する。

「え、ちょ、ちょっと」

慌てて引き止めようとするが、

「仲良くするんだよ」

と一言。静かに怒っているようで意見を許さないゼロに、リーシアは二の句がつけなかった。

「父上が怒っている時は逆らうな、リーシア。後が怖い」

「り、了解です」

「レフは父上の親友だ。兄弟のように育ったと聞いている。ついでに、ライは先々代魔王の息子らしいぞ」

「王子様ですか」

※先々代魔王と先代魔王ゼロの間には血縁関係はない。

「このロリコン」

「なんのことだ」

彼等の日常はそんな会話から始まった。

魔王ことヴィセ。

彼は結婚宣言をし、魔女リーシアを別の世界から呼び出した。

魔女であるリーシアの容姿は十六で固定されていた。ちなみにヴィセは二十五くらいに見える。

他の誰かでも無く、ヴィセはリーシアが良いのだという。その理由は明らかにしていない。

もしや、とリーシアは考える。

そして目の前で繰り広げられる光景。少女と戯れる魔王。その疑惑は確信に……………

「するな。確信とはなんだ。誤解を確信してどうするんだ」

「誤解もなにも、貴方と少女ではそうとるしかありません。通りで私を選んだわけです。少女趣味ならば、納得出来ます（言いながら少し傷付いているリーシア。まだ発育が望める年齢で成長を留めただけだと、何処とは言わないが薄い体のリーシアは言い聞かせる）」
そう、ヴィセが少女と戯れている光景。ヴィセでなければ親子か何かにしか思わなかっただろう。しかし、相手は魔王、ヴィセ。彼は独身である。隠し子もない、そんなヘマはない（ヴィセ談）。

そして子供好きには見えない彼。異様としか思えない。ミスマッチにも程がある。

ただの子供好きとも思えないのであれば、そう取るしかないではないか（リーシア談）。

その話題になっていく少女といえば、ヴィセの膝の上で可愛い表紙の本を広げている。なかなかの大物である。

ヴィセは軽く溜息をつく。とリーシアをちろりとみる。

「なんですか」

ちろりとみられたリーシアはいつもと変わらない。
ヴィセはニヤリと笑うと、

「ヤキモチか？」

と聞いた。

だが、

「馬鹿じゃないですか？」

リーシアに絶対零度の切り返しを喰らい、肩を落とした。

「レフの娘だ。疚しくないぞ」

「似てないですね」

「まあ、養子だからな。レフにしろ、ライにしろ子供は出来ない。

その代わりの長命でな。俺達とは違う」

「…違うとは？」

「こっちの人間でも寿命はそちらの二倍程度、あとは体内に蓄積できる魔力次第。城に仕えている將軍で三百つてところだな。レフとライ、あの二人はもっと歳くってるぞ」

「私より年上ですか。目上は敬わなくてはですね」

「それをいったら俺もリーシアより上だな」

「…貴方は歳の割に落ち着きが足りません。だから気になりません」

敬いませんよ、はつきり断られるヴィセ。

地味に傷付くのだが。

「へーか、泣くの？」

可愛い少女の声はリーシアではない。

いつの間にか、丸いくりつとした目がヴィセを見上げている。
そして、

「へーかイジメちゃ、メッよ？」

リーシアに向かって言う。ヴィセはニヤリと笑い、

「メッよ？」

と一言。

どんなに可愛く言っても、ヴィセは可愛くは思えない。
キモい。
そんな日常である。

「…キモいは傷付くな」

「へーかキモいの？」

「キモいですね」

「キモくないぞ。可愛いぞ」

「どこがですか」

「性格」

「へーかはキモい！」

「（子供は残酷です）」

「（いや、意味わかってないだろう。しかし、あれだ。子供の罪は親の罪。レフは滅給だな）」

「（…貴方も残酷です）」

薔薇の剪定。

それは、親が子供を寝かし付けるために話す物語としてはポピュラーなものである。

実話として語られるこの話、解釈の仕方にもよるのだが悲恋として話される場合が多い。

「貴方は王となるだろう。」

『ローズ』と名乗る美しい少女はそう言い、彼に薔薇の刻印を刻んだ。

やがて戦乱の世に一つの国が誕生する。

王の傍らには、その美しい女の姿があった。

「私は貴女を妻にしたい」

王はそう求婚するが、女はそれを受け入れることが出来ないという。

「私は貴方を王とするためだけに存在している。

その貴方が王となった今、私の存在を世界は許しはしないだろう。

私は貴方と共にはいられない。

百年の月日を与えよう。その間、貴方が良い王である限り、私はこの国に祝福を与える。

それが私が貴方のものという証……」

王は歳をとらぬまま百年、国を治めたという。

その間、王の住む城の庭園には美しい薔薇が咲き誇っていた。

「…こっちの界でも定番なんですネ」

ローズ剪定と題された絵本を手に取りながら、リーシアはぺらぺらと紙をめくった。

可愛いらしい鮮やかな色彩の少女が描かれている絵本は、絵こそ違えど内容は自分が見知っているものと遜色ない。

「まあ、な。実際のところ、面白いと思うぞ。実話というかなんとい

うか、今も人間界にはその国は残っているし、その初代国王は確かに百年以上生きている記録もある」

「ローズのそれに因んでの花祭りも残っていますからね。全てが虚飾では無いでしょうが、あくまでも子供用に話を構成してありますから多少は差異もあるでしょう？」

「どうだろうな。父上ならもつと詳しく知っているかもしれないが……。俺の前には現れなかったが……」

ヴィセが呟く。

「父上は……会っているらしいが」
呟き、苦い顔をするヴィセ。

「会っているんですか！？ローズに！？」

ローズの剪定というのは、歴史をひっくり返すと度々起きているものである。

歴史を調べる者にとって、良い研究素材であるがなかなか進まない題材でもある。何しろ、証人が国の中枢、国王だ。一市民、一研究家、歴史家には手が出せない。剪定されたい国王は揃って記録にすら残したがないのだ。

永く生きているリーシアにもそれは同じことであり、かの国に保管されているであろう数少ない公式記録にすらお目にかかったことは無い。

「ちょっと話を聞いてきます！」

ばたばたと走ってゆくリーシアを眺めながら、ヴィセは溜息をそつとつく。

膝の上で遊び疲れてしまったレフの子供である少女が、規則正しい寝息をしている。

小さく、まるい頭を撫でてやるとふんわりと少女が笑みを浮かべた。

「…そういえば、リーシアはあの話が好きだったな」

懐かしい昔。

夢のような、そんな邂逅。

ヴィセは自分の手の平を眺める。

ザザッ

砂嵐のように揺らぐ自身。

あと、少し。

まだ……。

ちよいと後のゼロとリーシア。

「ああ、ローズか。タコ焼きをつつきあった仲だよ」

「…た、タコ焼き？」

「うん、食べ終わってからかな。王になってみない？ って言われたよ」

「そんなにフランクなんですか」

「うん、がっかりだよ。記録に残そうにもいろいろ問題がある人でね。禁書扱いになること請け合いだよ。知らない方が良いことも世の中にはあるんだよ」

因みに証拠といわんばかりに、ゼロの腕には薔薇の痣があったらしい。

おまけ

読んでとせがまれた子供用の絵本は内容が暗記できる程に何度も、或いは何百と繰り返し読み返したものだ。読まされたものだった。

別に自分が好きで読んでいたわけではない。

薔薇の剪定。読む人間によっては解釈の違いが目立つが、概ね悲恋とされる物語。

…嫌いだ。

貴方が王だ、と美しいローズに言われた男。名前を、ロステイル。自分に尽くしてくれる美しい女に惹かれてゆくロステイル。そして彼は勘違いをする。

そこには愛などなかったというのに。

尽くしているのはただの役割でしかなかったというのに。

愚かで、滑稽な薔薇の王ロスティール。

歴史上に度々現れる『ローズ』。彼女は十二いる神柱の一柱である。名前をミリティア。役割であり、力の『根』は選択と確定。

人間と神が恋愛などできるのだろうか。

ミリティアは出来ない。

己の存在理由を忘れてしまわない限り。

それは自身を放棄することと同義だ。

出来ないからこそ理解できる。

「俺も、病んだか：」

月夜を一人愉しむヴィセは、愚かで滑稽なロスティールと使命を繰り返すのみのローズに思いを馳せる。

ただ願うのは、自分の物語が悲恋とならないといいということである。

16 殿下編（前書き）

昔はよかった。

16 殿下編

「よし、人間界にでも行くか」

魔界の第二王子はそういつて部屋を出ていこうとする。突然のことに呆気にと取られていたレフは、王子がドアノブに手を掛けたところで正気を取り戻した。

「で、殿下お待ちください！唐突過ぎる上に、それは禁則事項になっていきますから！」

界を越えることは、第一王子が行方不明になって以降、原則禁止された。

「なんでだ？俺の父上はしょっちゅう家出を繰り返していたのだろう。事前に報告しているだけマシだろ」「そういう問題ではありません！禁則ですよ！禁則！」

「きまりとはだいたい守るものだが、時々破るためにある」
真面目な顔をしながら王子は言うが、言っていることは無茶苦茶である。

「殿下！」

「うるさいぞ、レフ。今、俺が行かないと父上が行くことになるじゃないか」

「…何のことですか？」

「人間界のことだろう」

「……………」

「陛下！どういう事ですか！？」

レフは王子の首根っこを掴みながら執務室に駆け込んみ、説明を求めた。

掴んだ先の王子がぐえっと叫いたが構ってはいられない。

「…ああ、調べ物があるから散歩がてら行っておこうかと思ってた」
よく、わかったねと返す魔王陛下。

頭が痛いのを必死で我慢するレフ。どうあっても、この親子は立場を考えずに行動したいらしい。

「というわけで、俺が行きます、父上」

というわけでの前が無い、喉元まで出かかったツツコミを飲み込みながら、己の主へと視線を送る。

（駄目ですよ、陛下）

祈り虚しく、

「うん、行ってらっしゃい」

（だああああ！！！！）

心の悲鳴は押し込めた。

ただ、王子がいない数日レフは一言も話すことはなかったという。

「うん、取りあえず、解りやすく簡潔に話してみたらどうか」

我等が偉大なる魔王陛下は混乱状態にあるライに、のったりと話し掛けた。

「深呼吸してから、ゆっくり話してみて。きちんと聞くから」

「う、ういす」

ライがゆっくり深呼吸をすると大分落ち着いたのだろう、幾分しっかりとした声で話しはじめた。

要約すると、こうだ。

『殿下がいきなりドラゴンを倒すと城をでていった』らしい。そして、

『血だらけになって帰宅』というわけだ。

殿下は無傷だったらしいから、全て返り血だろうとのこと。

「で、ドラゴンは倒せたの？」

魔王がライに問うと、ライは頷いた。

どうやら、ドラゴン退治は成功したらしい。

何が問題なのかというと、

「困ったな。ドラゴンは一応保護指定されてるのに」
だ。

困ったようには見えない魔王だが、結構な大事ではある。

「なんでドラゴン退治だったの？」

ふと、疑問。いきなり、思い立つには突飛すぎる。

「アルフィナ様の影響かと」

その一言で魔王は理解したらしい。

その後、魔王は自分の息子と一対一で話し、諫めたのだという。
いわく、

「勇者になりたくても、将来は魔王になることは決定してるから難しいと思うよ」
だ、そうな。

『勇者』それは『魔王』と相対する存在。

勇者一族のアルフィナは魔王陛下の奥さんである。

殿下はアルフィナの影響を多大に受けて成長を遂げる。

しかし、大きくなってみれば父親の遺伝子も色濃く、ある意味、最高の魔王陛下の誕生となる。

そう、ある意味では。

因みに、殿下に与えられた罰についてはライ（護衛としてお供）は
思い出したくも無いほど辛いものだったという。
そのお話は後程。

17 (前書き)

殿下、罰を受ける

「父上、魔王というのは血族でなるものではないのなら、俺がならなくてもいいのでは？」

魔界の王子は将来になりたいものがある。

何度か諫められてはいるが諦めることができないでいる。

「うん、そうだね。でも、『力』が一番ある人間がなるものだから仕方ないよ」魔界で最強、それが魔王となる条件である。

「父上が一番強いじゃないか」

「今はね。そのうち抜かれるよ。子供は親を越えるものだから」

別に魔王という地位に執着はない現・魔王。彼は元々、スラム出身の孤児である。強くなりすぎた魔力と、その強靱な肉体はある事件で知れ渡り、突然『魔王』となったにすぎない。彼の子供は、彼以上に潜在能力を秘めているのを彼は知っている。

「俺は、『魔王』にはなりたくない」

「うん、知ってるよ」

母親のアレに憧れているのを父親である彼は知っている。

「でも、勇者になるのは無理なんじゃないかな」

息子は『勇者』になりたい、それは無理だ。

「魔王の息子であることには間違いないしね」

人間界の伝説的英雄『勇者』。

その子孫最後の一人『アルフィナ』は魔王討伐に旅だたされ、いろいろあって魔王『ゼロ』と結婚した。

その息子は確かに勇者一族かもしれない。だが、同時に『勇者』の討伐対象にもなってしまう。

「でも、それでも勇者になりたいというなら仕方ないね。僕を殺しとく？」

「…父上。俺は父上を殺したいわけでは」

「うん。ただなりたいたけならやめたほうがいいよ」

魔王である父親とその息子、彼等の日常は概ねこんな感じである。

「陛下、本当にやったんですか」

レフの言葉に魔王陛下は「うん」と軽く返した。

「一応、きまりだからね。形式上の事でも罰しなくちゃね」

魔王の息子である少年が、保護指定されているドラゴンを傷付けたことは記憶に新しい。勇者のドラゴン退治という伝説をアルフィナから聞かされ、真似をしに行ったらしいのだ。

ドラゴンを何とかしようとすれば、一個小隊位は戦力がいるはずなのだがソレを一人でやったというのだから末恐ろしい。

「しかし、大丈夫ですか？ 人間界に混乱は起きませんか」

第二王子への罰は『短期間、人間界への流刑』である。

「大丈夫なんじゃないかな。ライもついているし」

レフがぴたりと停止する。

「ライの分の仕事は僕がやるよ。現場にはいけないだろうから、その時は協力してもらおうからよろしく」

姿を見ないと思っていたライはどうやら『旅出』ったらしい。

（帰ってきてても、暫く書類仕事は代わりますから、成仏してください、ライ）

今はナキ友人へと思いを馳せるレフ。その祈りを聞き届ける存在がないのはわかっていても、祈らずにはいられない。

自分が被害に遭わなかったのは幸いだったろうが、巻き添えをくったライは憐れだ。どんな無茶をするのかわからない殿下をとめる役など、やりたくもない。とはいっても、確実にとめられないのだから振り回されることになるのだろう。

「うん、今日も平和なようだね」

魔界は本日、特に平和なようだ。

――神は人の願いを聞いたりしない。

「おかえり、ヴィー」

彼の父親は三年の月日を思わせないような淡泊さで息子との再会を果たした。

長く生きていると時間の経過さえも鈍るとしか思えないほど、感動とは掛け離れた再会である。

ヴィセは不機嫌そうに辺りを見回すと、やはり不機嫌そうに父親に声を掛けた。

「大して変化も無く、平和そうなことで。父上もお変わり無く」

「うん、三年くらいでは変わらないだろうね。ヴィー、帰ってきたくなかったのは分かるけどアルフィナにはその仏頂面を見せないように」

「それは、わかってる」

「それならいいよ。うん、経緯は聞いてるけどね、あまり無茶はしないように。といってもきかないんだろうけど…」

「…親子の縁でも切るのか？それとも、今俺を殺すか？」

これからのことを考えていたヴィセは、目の前にいる男が『父』として『王』として反対するだろうと思っていた。

それこそ勘当されかねないくらいに。処刑されかねないくらいに。

しかし、父はそんな彼を咎めようとはしなかった。

それどころか

「いや、意味はないだろうからね。なら君はやりたいうにすればいい。そのための『力』だ」

止めるどころか、後押しをする。

そんな父を眩しそうにヴィセは眺める。

越えようとしている壁の高さは頂点が見えないほどだ。だが、

「俺は、貴方の後を継ぐ…貴方を越えてみせる」

ヴィーはもう、決めたのだ。

「うん、：おかしなこと言ってるね。もともと君は魔王になるのに。それは決定事項だからね」

「：父上：折角、格好よく決めたのに最後で落とすな」

「うん、シリアス台なしだね。でも僕等っぽくていいと思うよ」

「っぽいとは、なんなんだ？」

「うん、シリアス担当は僕等ではないということだよ。」

それに、ね。ヴィー。僕は国の王として、君一人の犠牲ですむのならそれは仕方ないと思っているよ。父親としては最低だろうけど。そして、一旦君が王になれば国は君に従う。僕も国の一部だ」

自由にやればいいよ。

ただ、後悔だけはしないように。

魔王となったヴィーが魔女を召喚したのは、それから二百十二年後である。

19 記録編(前書き)

戦闘パート 突入。
伏線回収始めないと、です

19 記録編

「……執務はいいんですか？」

普段ならばここいらでレフが乱入してきてヴィセをズルズルと引きずってゆくのだが、今日は静かである。

「父に執務を押し付けてきた。問題ないだろう」

しれっと答えるヴィセに呆れ返り手元の本から視線をあげると、リーシアは沈黙する。

——ザザッ

一瞬の砂嵐。

いや、何もない。

「どうした？」

「……いえ、目疲れてるんですね。視界が一瞬揺らぎました」

「ずっと本読んでいるのが体に良くないのだろう。そりゃ、目も疲れもする。よし、たまには外にでるか！」

まあ、たまにはいいだろうと、リーシアが諦めたところで何かいろいろ終わってしまったのである。

世界各地には、神代から残る遺跡というものが存在する。現代でも確立されてない魔法法則が利用された遺跡の数々は秘められている機能も力も計測ができず、危険なものも数多い。

国の扱いとしては、立入禁止と封印指定で今は許可のない限り侵入不可である——が、

「俺は度々遊びに行っているぞ」

と、一言呟き転移先は山奥。

「城の連中はなかなか付き合ってくれん。ライを連れることもあるが、あいつの魔法は大型の破壊魔法ばかりでな、こういうのには向かんのだ」

「…そうですか」

入り口は洞窟になっていた。湿度があるかとおもえば考えていたよりも酷くはない。それよりも、だ。

「…この遺跡、稼動してませんか？ 魔法素の流れが奥に向かってるんですが…」

膨大な魔法素が集まってきている。

「ふむ。俺達二人が来たことで起動したか」

壁が発光し、人工的なものに変換する。洞窟に扮していたものだったらしい。

リーシアの一步前に出たヴィセはすらりと煌めく剣を抜くと一閃する。

鈍い感触と共に何かが弾け飛ぶ。

視覚出来ない何かがゆらゆらと近づいてくる。

「この遺跡の防人ですかね」

リーシアが指を弾くと閃光が何かを貫く。

「だろうな。余程俺達を奥に行かせたくないと思える。リーシア、見えなくてやりづらい。視覚できるようしてくれ」

言いながらも無駄のない動きでヴィセは切り刻む。一步進むごとに増える相手。勘で戦うのにも限界はある。

「簡単に言いますね。…やってみます」

視覚できない何かが次第に形作られていく。リーシアの魔法構成が編み目状に展開され、膨大な魔力が伝ってゆく。そうして現れたのは、

「泥人形みたいだな」

子供が造形したようなヒトガタである。

わらわらと溢れる防人のヒトガタをヴィセは不敵に笑うと、一断ちで三体を切り捨てて。

「美的センスを疑う造形ですね。醜い…」

リーシアの容赦ない魔法が『ヒトガタ』を破壊してゆく。

「しかし、数が多くて面倒だな。防衛機能だけでも早々に破壊せん

とな」

「ですね。こう、数が多いと大型の破壊魔法をぶっ放したくなりま
す」

「遺跡が崩れ落ちるのは流石に困るからな。我慢してくれ」

「分かってますよ。ああ！もうっ、来なきゃよかったですよ！」

乱発される魔法は小規模であるにも関わらず的確にヒトガタを貫き、
破壊してゆく。

「そう言うな、リーシア。――来るぞ」

ヒトガタの最後の一体を塵に還すとヴィセは剣を構えなおす。

一人の女がゆらりと暗がりから姿を現す。

美しい女。

最期に看取った時、女は原形を留めてはいなかった。

奥底に沈めた記憶。

それを実体化したような女は何も映すことのない瞳を一瞥する。

「――母様？」

リーシアの声が反響した。

私の記憶

最初の記憶

私に残る母の記憶は

狂ったように笑うあの姿

何も理解することが出来なかったあの日。
失ったものの大切さも重大さも後になって教わった。

「母様？ リーシアのか？……間違いないのか？」

「姿形だけです。あの人はもういません」

リーシアの母親を模ったヒトガタを苦い顔でヴィセは眺める。
ゆらりと女が傾く。

たんっ

軽い音と共に跳躍する防人のヒトガタ。

——はやい！

第一撃を間一髪でヴィセはかわす。

先刻まで対峙していた防人達とは明らかに動きが違う。続く第二撃を手にした剣で受け流すと、そのまま相手の懐に入り込み反撃する。空を斬る軌跡。

明らかに入ったと思ったヴィセの一撃に、しかし手応えはなかった。詰めていた筈の距離が、一瞬にして数歩開いている。

——これは……。

魔法構成すらない転移をしてのけたヒトガタは空気中の魔法素を取り込み始める。

「…魔力を込めるか」

武器など手にしていない姿。だが、あの攻撃をまともにくらいでもしたならば、どうなるかわからない。魔法構成もなしに転移をしたことから、ただではすまないだろう。

「防衛の魔法をかけます」

リーシアの言葉と共に、ヴィセの体が明滅する。
同時に始まる攻防。

一撃、一撃が物凄い魔力が籠った攻撃をヴィセは自身の魔力を込めた剣で受ける。

びりびりと拮抗する魔力の奔流。

……競り負けたら、死ぬな。

「――吹き飛ばし！」

拮抗を崩したのはリーシアだった。

リーシアの魔法がヒトガタを吹き飛ばし、倒れた瞬間にヴィセは剣を刺し貫く。それは、びくんっと大きく跳ねると動きをとめた。

呆気なく停止した女の姿のヒトガタは虚空を見つめたまま霧散する。静まった辺りを警戒しながらリーシアを振り返り、ヴィセはリーシアに歩み寄る。

「大丈夫か？」

無表情の彼女からは感情は読み取れない。

「平気です。行きましょう。こんな悪趣味な遺跡、とつとと停止してしましましょう」

「この遺跡は他人の記憶を読み取って実体化させるもののような。それを防衛として使うのだろう。

知り合いの顔が敵ではやりづらいだろうから。理に適っている。最初の防人があやふやな造形だったのは、俺達の中の記憶の汲み出しが上手くいかんかったというところだろう」

分析をしているヴィセを横にリーシアは構成を放つ。

が、標的に当たる前にそれは霧散した。

「やりますね」

「だろう？ あれは、俺の師でもあるのだ。俺の父がいなければ、あれが魔王になっていたろう……」

「王に？ 似合いそうもないですが、そういえばそうですね。先々代魔王の息子でしたっけ」

リーシアの回答にヴィセは笑いを隠さない。確かに、国王の柄では

ないだろう。

だが、戦闘能力は高い。

純粋な力で繋いでゆく王の形としては歴代王と並べてみても遜色はないはずだ。ただ先代、今代が異常だったというだけのことである。あれと呼ばれるヒトガタは剥き出しの剣をヴィセに向ける。

びりびりと向けられる敵意は本物と遜色なく久しく見ていなかったものである。

「さて、『ライ』の相手は俺がしよう」

向かい合うヴィセは楽しげに笑うと、己の剣を生まれた時から知る男の姿をした相手に向ける。

「では、あちらは私の相手ですね。もう一度、姿を見るとは思いませんでしたよ」

奥から、わらわらと湧き出るように現れたのはリーシアを育成した人間達だった。慈愛など感じない白衣を着た姿は、リーシアの育成が目的ではなかったことを物語っている。

「……さて、もう一度記憶の隅へと消えてもらいましょう」

リーシアの髪が魔力の奔流でゆらゆらと揺らぐ。

美しく緻密な構成がリーシアを中心に紡がれてゆく。右手掌をかざしたリーシアは蠱惑的な笑みを浮かべながら破壊をはじめた。

それは他者から見れば、虐殺に近いものがあるだろう。人の形をしたものを彼女は笑いながら葬り去るのだ。

広がった構成は魔力を帯び、彼女の敵となったものを絡めて離さない。動けない的に対してリーシアは指を弾くだけ、ただそれだけで鈍い音とともにヒトガタは塵と消える。

研究のためのモルモットとして作られたリーシア。

人ではないものを作り出す研究と実験は、かつて天界より齎された技術の一つである。不完全な技術であるそれは、多くの犠牲の果てに偶然『リーシア』という結果をだすこととなった。

そうして作りだされた、リーシアは最初で最後の成功例として生かされ育てられる。失敗作とされたサンプルは、リーシアの能力の計測と訓練と称して闘わされ処分された。

——初めて、人を殺した。相手は母親だった。

素晴らしいトラボの白衣を着た人間は手を叩いていた。どういうことなのか分からなかった。ただ自分の日常はそういうものでしかなかった。

空を見たことはなかった。

空というものを知らなかった。

あったのは檻。

闇と白い壁。

血の赤。

体を切り開かれる痛みも、他人を殺す悼みも、辛いのかも悲しいのかすら理解することなく、それを思考することすらなかった。

歪んだ生の形。

そして、唐突に少女は目覚める。

——私の名前はリーシア。変質した存在。私は、魔女。

名前などなかった筈の少女には知識として、自身の名前を認識出来ていた。そう、知識はある。

空を知らなかった筈のリーシアは、当たり前のように朝焼けの空も夕陽に染まる空の美しさも知っていた。

世界の在り方。生活。料理。

知っている。

知識として認識できるのに、そこには『思い出』が欠けている。

何故。

どうして。

何が起きたのか。

その知識がいつ手にしたもののかを思い出せない。

その記憶が失われていることに愕然としたリーシアは、過去の記録を追い始める。

募る焦燥。

見付からない。

最初から無かったように残されていない記録。

何故、無いのか。

自分が作られた施設も。その国さえ見付からない。

「あなたがたが話すことができたのならば、知っていたんでしょ
うか」

自分を作った人間達を模った防人。

話すことないそれらは、過ぎ去り世界の何処にも残されていない記
録である。

21 (後書き)

修正しますが
とりあえず載せます。

22 (前書き)

ゆるさ 復活

互いに繰り広げられている攻防は、相手を破壊することに何百という年を費やし高めた技量である。

魔王の息子として生まれながらも、その存在を認められることがなかった『ライ』は初めて個人として認めた『ゼロ』にその命ある限りの忠誠を誓い彼の剣となったという。

「奴の剣はもつと重かったぞ」

姿勢が同じでも、使う技が同じでも、所詮は人形。込められた想いも覚悟もない。

『俺が教える剣は誰かの命を奪うものだ。殿下にその覚悟はあるのか？』

『訓練で死ぬようなら実戦でどうせ死ぬ。生半可な覚悟ならば相手に業を背負わせるのも失礼じゃねえか。んなことだったら今俺が殺してやっから』

まともな敬語を使わないライは本当に容赦なかった。

「終わりだ」

跳ね退けた一手に隙ができる一瞬。ヴィセは踏み込み真っ直ぐ心臓を突き破る。塵となって消えてゆく姿。

「毎日のように見ている顔だ。二人もあんなのはいらん」

ふと、横を見ればリーシアもあらかた殲滅させたらしく目が合う。

「私の方がはやかっただすね」

なにやら誇らしげである。

「…うっさい。たまたまだ！」

珍しく悔しげなヴィセにリーシアは笑い出す。

遺跡の中心地はすぐそこだ。

「――リーシア、俺は不満だぞ」

「なにがですか。いい運動になったじゃないですか」

「チープな罠とかを期待しているんだぞ、俺は」

スイッチを踏んで矢が飛んでくるとか、落とし穴の下に竹やりとか。ぶつぶつと言うヴィセを冷めた目で見遣るリーシアは呆れ返り嘆息する。

神代からの遺跡にそんなアナログな罠など劣化して機能していないんじゃないのだろうか。危険性の低くなった遺跡など荒らされてしまつて今の今まで残されていないだろう。

「記憶の再生、が目的の遺跡というならばこれを作った存在は失つた誰か取り戻そうとしたということでしょうかね。

ただ、記憶を汲み出して実体をもたすだけならばあまり意味がないように思いますから」

「知らん。しかしそれだったら、ここまでの技術があつても完成はしなかつたんだろうな。器を作つても中身が空なんだ。空なんぞ空き箱くらいの価値しかない。

全く、こんなようなくだらない遺跡ばかり残すとはな。岩が転がつてくるとか、水が流れてくるとか………」

「貴方を楽しませるだけじゃないですか、ソレ」

アホな会話をしているうちに中心地についてしまった。

『防人』もあれから現れる事なかった。

見上げた先には核となつていのは巨大な魔石。集められた魔法素は此処で結晶化していたのだろう。

遺跡全体に張り巡らせていた構成も此処で制御していたらしく、更に複雑化している。

「んー。持つて帰りますか？魔石。とっちやえば止まるんじゃないですか？いい値段になりますよ、コレ」

大きさといい、純度といい、蓄積されている力の量といい、見積もつて人間界では軽ーく国家予算並かと計算するリーシア。

しかし、興味がない魔界の王は

「いらん。こんな毒にしかならん物なんぞ。さー、破壊するぞー」と、ぶんぶんと腕を振るう。

加減を忘れたヴィセが遺跡をも崩壊させてしまい、二人は這う這うの体で城に帰ることとなった。

「いや、悪かったリーシア。ちょっと加減が、な」
「……二度と付き合いませんから」

22 (後書き)

いろいろ 隠してません。

23 (19のB)(前書き)

ライの視察とは

23 (19のB)

「新しく遺跡が発見されたらしいな。よし、行ってみるか」
基本、魔王陛下は思い付きで行動する。

危険のあるところでも、ひよいひよいと行こうとする。止めようと
しても、聞こうとしない。

（誰だ。この方の前でその話しをしたのは。発見された遺跡は、今
朝方報告がきたばかりなはず）

そして、その報告書はレフの手に握られている。

うきうきとお出かけ準備をし始めた魔王。

――まずい。マジで行く気だ。

止まるわけがない。わかつている。

しかし、止めなくてはいけない。

諦めつつもレフは魔王陛下に進言する。

「陛下お待ちください。」

何処から聞いてきたのかは知りませんが、貴方を危険な所に行かせ
られる訳無いでしょう。

立場というものをお考えください」

「なんだ、レフ。考えてるぞ。だから、行く」

「その思考回路はどうなっているのですか！」

うるさいと、目線で咎められようが知ったことではない。心の叫び
だ。

「なんだ？　こうなっていると頭をかつ捌いて開いて見せればい

いのか？　痛いだろう、ソレは…」

斜め上を行こうとする魔王。

「頭を開いても脳みそしかでてきません！　駄目です。遺跡は立

ち入りを禁ずる、です！　国で決まっているものを国王自ら外れ
ないで下さい！」

「よし！　国王が許可する。俺の立ち入りを許可」

がりがりと殴り書かれた紙をぺいっとレフに投げ付けた魔王。

何故、こんな時のやる気と行動力は素晴らしいのか。

投げ付けられた紙を受け取ったときには魔王陛下はもういない。

「レフ、いるかい？」

「……!？　ゼロ？　どうしました？」

「いや、ヴィーに仕事任されたからね」

——はやい、

入れ代わりで入って来たゼロは椅子に座ると、あれ？と首を傾げる。

「あの娘も連れていったみたいだね」

リーシアまでもがいなくなったという言葉を受けたレフの叫び声は、城の窓ガラスを割ってしまふ程のものだったという。

ゼロはそれに対して、

「うるさいよ、レフ」

と一言のみだったらしいが。

『死者に出会った』

血だらけで駆け込んできた男は、第一声をはっきりとそう言ったという。

『仲間が殺された。殺したのは俺の死んだ母だった』

幽霊のでる山で、一部の人間には有名なオカルトスポットだった。

行方不明者も度々出ている為に、何度か国から調査が入れられていた場所でもある。

『洞窟に偽装』

『解析不可の魔法構成』

『死者』

わかりにくい報告書はライの作成したものである。

陛下の耳に入れたのは、ライで間違いないだろう。

24 (20の裏で)

城の中は平和だった。

最近、よく起こる爆発もなく、逃げ回るような魔法戦もない。城に『魔女』が召喚される前の日常が戻ってきたようだ。

静かすぎて逆に落ち着かない。

右を見れば、仕事仲間である彼女もそうだったらしく複雑そうな顔をしている。

「落ち着かないわよね、やっぱり」

「うん。顔を見たらUターンしてくらい陛下には関わりたくはないけど、やっぱり城を空けてられると静かすぎてなんか、ね」

「最近の陛下はなんだかんだいっても楽しそうだね。私はやっぱり、騒がしくて自然災害のようでも最近の陛下の方がいいわ」

「執務室から出ている陛下は珍しいってくらいだったしね。陛下がいると、レフ様やライ様も一緒なこと多くて目の保養って感じで得したかななんて。」

あー、結婚してくれないかなー」

確かに、ね。と彼女がクスクスと笑って言う。

なにしろ、レフ様もライ様も独身なのだ。レフ様は御養女を迎えられてはいるが奥方はいない。陛下も、まだ婚約されていない以上可能性は捨て切れない。

城勤めの女官達にとって、彼等は狙い目なのだ。

美形で金も地位も力もある。

総じて、性格に難有りだが。

「貴女は誰が好み？」

彼女の問い掛けに、私はんーっと考え始める。

「陛下は、最高だけど性格が一番ヤバイしリーシア様にぞっこん。ライ様は、単独任務も多いからなー。長いと数年間は置いていかれるもんね。最近は長期は無いみたいだけど、リーシア様が落ち着い

たら城空けるんだろうな。ん、やっぱ置いていかれるのは嫌かな。となると、レフ様かなー。中性的な美しさは芸術的よね。子供好き、らしいし」

「でも、レフ様は不器用らしいわよ。掃除すれば余計に汚くなるって有名よ？」

聞いたことあるけど、さ。

逆に、

「いや、仕事できるのにそれってさ。逆に可愛いいかなって私は思う。」

「そういうあなたこそ、誰が好みなの？」
私、答えたし教えなさいや。

「……ゼロ様」

「え？」

既婚者じゃん。

しかも、子持ち。

愛妻家で有名だよ。

「仕方ないでしょう！可愛いんだもの」

あー、少年姿で固定してるもんね。

「でも、ゼロ様の本来の姿は……」

広間に掛かっている肖像画では大人姿で、可愛いとは言いがたい。美形ではあったが。

「…なのよね。でも、いいのよ。あの方達に年齢の概念は曖昧のようだし、視覚的に愛でられれば。陛下もちっさくならないかしら」
同僚の意外な嗜好を知ってしまった。

し、シヨタ？

……なにも知らなかったということ。

仕事しよ。うん。

24 (20の裏で) (後書き)

失礼しました。

紅い瞳をもつ魔王は、静かにそこに立っていた。

「なんだ、どうした、リーシア。眠れないのか？」

穏やかに魔王は振り返りリーシアを見詰める。

夜の闇に照らされる紅い瞳に映るのは、

慈愛か。

友愛か。

そこに恋慕の情は読み取れない。

悪意だけはない、それだけは確信している。

（ああ、私は彼を信じているのか……）

今まで、リーシアに近づいてきたどの人間とも違うのだ。リーシアの力を利用してとした人間もいた。リーシアの容姿に引き寄せられてきた人間もいた。畏怖し、リーシアを排除しようとした人間もいた。

「貴方こそいいんですか？ 今日流石に疲れているでしょう？」

「……？ ああ、遺跡巡りは遊びだからな。疲労のうちに入らんから平気だ。たいしたことはない。

リーシアこそ、記憶を汲み出されて不快だったろう。付き合わせて悪かったな」 「貴方だって汲み出されていたじゃないですか。お互い様です」

「…、いや、そうか。強くなったな、リーシアは」
しみじみと言われる。

何と言うか、

「なんですか、ソレ。死ぬ間際の老人みたいな発言ですね。気持ち悪いですよ。似合いません。止めてください。死にフラグ立てたんですか？」

戦いに赴く前の、終わったら……するんだ、に近い死にフラグである。

「死にフラグか。今ので立ったか？」

「です。立ちましたよ」

「立ったか。では、更に立てとくか。」

結婚しよう、リーシア」

「……………寝言は寝て言ってください」

リーシアの返答に彼は何が楽しいのか笑う。

真剣さが無い告白。

リーシアが断ることが前提な空虚なプロポーズ。

空の……。空き箱くらいの価値。

なんて、皮肉な。

いや、わかっていての自虐か。

だから、彼は笑ってこう言う。

「それでもいいさ、リーシア。今は此処にいてくれるだけで、な」

この時だけが、熱を帯びる。

リーシアは視線をそらし、流れている空気を変えるようにわざと明るい口調で言葉を返す。

「結婚する気はないです」

「大丈夫だ。気分など俺が変えてやる」

「粘着ですね。恐怖を感じますよ」

「褒めるな。照れるぞ」

斜め上の解釈をする男だ。

（全く。——どこを褒めたように脳内変換したんですか）

「諦めが悪いのは長所だぞ、リーシア」

「だから、心の中のそれに返答しないでください。——うう、余計に疲れを感じる……」

「それは大変だ。早く寝ろ。」

明日は、甘い菓子でも届けよう。疲れた時には甘いもの、だからな。期待しとけ」

「分かりました。期待します。とびっきりでお願いします」

リーシアは甘いものが好きなのだろう。妙にきびきびとした発言を

したリーシアはそう言うと、踵を返し中庭をでてゆく。
その顔はどこと無く嬉しそうで、輝いている。

「よい夢を、リーシア。」

25 (後書き)

彼の長所と短所は紙一重。
私はそう思います。

26 (前書き)

とびきりの菓子。

「……………」

「魔女さん、ショックなのは分かるが――」

ライの言葉を遮ってリーシアは茫然と

「有り得ない…」

と漏らした。

その声は正気とは程遠い。優雅なティータイム、薫り立つ紅茶と絶品な焼き菓子。中庭にセッティングしてあるそれはリーシアの為のものである。

ライにとっては、日常的にあることであるので驚きはないことだったのだが、リーシアはそうはいかなかった。

一体何があったのかというと。

「何故、美味しいのに落ち込むんだ？」

「そう、それが不思議です。何故、美味しいのですか！」

声を掛けたのは城の主であるヴィセだ。

彼は、珍妙な表情でリーシアを見下ろしている。

テーブルについているリーシアはそんな彼を認めない。

（珍妙なのは貴方です！）

ヴィセは真っ白いヒラヒラエプロンを身に纏い、甘い香りを漂わせている。

（何処の新婚さんですか！）

この日発覚した事実、今までリーシアに出されていたお茶菓子はヴィセお手製であるらしい。

（ああああ！！ 納得できない！！）

リーシアの背後で控えているライは助けを求めるが、そんなものは無い。

「今まで散々食べてきたんだ。諦めて受け入れろ。この現実を」

「なんか悔しいー！」

わはは、と笑う魔王陛下。

なにやら混沌としていて関わりたくないライ。

散々、御飯やお菓子を美味しいと絶賛していただけに堪えるのだから、リーシア。

餌付けに成功したと言わんばかりに、踏ん反り返るヴィセ。

「うう、なんで美味しいんですか」

「あー、陛下なあ。昔、城を出されたことがあってな。外で食べて、口に合わなくてなー。自分で食えるもんを作ってたんだよ」

ライが遠くを見ながら言う。

ライが思い出す過去は、ライ自身には苦いものである。

「…手先、器用なんですね」

「天才肌だよな。そのうえ、凝り性なんだよな」

羨ましいことだが、素直にそう思えない。

「うう、認めたくない…」

そう言いつつも、手はヴィセお手製のお菓子に伸びる。

食べ物に罪はない。

美味しいものは美味しいのだ。悔しいが。

「今日の夕飯も作るって張り切ってたかな、まだまだこれからだぞー」

ライが気を確かに持てと声をかけるが、リーシアは「うう…」と唸っている。

「陛下、仕事をなさってください！」

「おお、レフ。ちょうどいい時に来たな。じゃあ、コレ」

「…？ 包丁と芋？」

「剥け。これ命令」

「……御意。……………ぬるぬるしますね。この芋」

「……………おお、芋が血だらけに！？
だ！？」

何故、そうなるん

「…痛いですが、陛下」

「お前は、不器用だな…」

27 (前書き)

自然災害、です

ぺらりと落ちてきた紙には、几帳面そうな字がぎっちり並べられていた。今、読んでいる記録書と同じ字体である。

リーシアは何を思うわけでもなく、手にした紙面に目を走らせた。

『二代に渡って、王に仕えているが思っていたよりはドロドロとした暗部が少なく拍子抜けした。もっとう、暗殺やら内乱やらがあつて当たり前かと考えていたのだが、平和だ。

いや、平和なのはいいが。

記録によれば、四代目以前には王の地位欲しさの権力争いが絶えず起きていたとある。とはいっても、王の選出方法の唯一といつてもいい条件が国で一番強いということのために権力争いといつても内容はエグい方法ばかりだったらしい。

歴代王の不審死が多いのはこのためか？

決闘も多かったという。時代別に残されている地図の改訂の多さと早さ、地形の大幅な変化の理由はこれだろう。

詳しい記録は第一図書の禁書欄の（黒く塗り潰してある）に参照する。

今も王以下の上層部での権力闘争はあるが、水面下のものであり表立つことは比較するまでもなく少なくなっているようだ。表立つと王の仲裁が入るが、それを避ける傾向があるようだ。

↓王位争いの少なくなった理由とは？

理由は幾つかあるのだが私が思うに以下のことではないかと記録する。

まず、王は最強だということだ。

先代から今代の王には逆立ちしても個人で勝つ見込みはない。

国王軍が総出で、それこそ死ぬ覚悟で戦いを挑んでも勝つことなどは出来ないだろう。

それくらいに実力差があるのだ。

国最強は伊達ではないということである。

自分が思うに、王を物理的に傷つけることなど不可能ですよ、と。

ライいわく、王はくしゃみの拍子で世界を消しちまいそうだ、と。

関わらないのが一番だと城勤めの人間は言う。

関わるな、顔を見たらUターンが城勤めの女官の標語らしい。

自然災害、魔王↑部下の文官達の標語。もう、諦める。避けられないというのが伝わってくる。

第二に、現王を倒しても王になれる訳ではない。

王は常に国で最強を冠す職業。

他に強い人間がいたら、取って代わられるだけである。

だから、王を倒す意味はないに等しい。

というのも現国王を殺しても彼の父親が再び王に君臨するだけなのだ。彼等の強さというのは常軌を逸している。

労力などを考えた場合、得られるものが割に合わないということだろう。

少なくとも私は、そこまでしても得られるかわからないものなどは要らない。』

ぺらりと裏を見ると、これまた真っ黒と字が並んでいる。

『記録』

先々代の王について

歴代王の中でも卓越した魔法構成技術を持ち、軍務にも秀でていた。しかし一方で、狂気の魔王と呼ばれ、数々の禁忌とされた実験、魔法へと手を出す。その表向きの理由は当時泥沼化していた戦争への勝利のためとあるが。長引かせ戦火を拡げていたのは先々代の王自身であったと調査により発覚している。自作自演だったのだ。

後に、スラムに住む一人の少年に殺害されている。

ある日、城に現れたこの少年は瞬く間に王の元へとたどり着き、息

をするように極自然に王を殺害した。圧倒的な力を誇示してみせた少年の力と、この衝撃は国全土を震撼させた。

絶大なる力を持つ少年は『魔王』となり、永く続いていた第一界（天界）との戦いを締結させた。

追記

第一界の消失

消失と同時期、第三界（魔界）王の第一子、次期魔王第一候補が共に蒸発。』

「何読んでいるんだ？リーシア」

ふっと紙面から顔を上げるとそこにいたのはヴィセだった。

「ああ、持ってきた本（レフの日記）の中に走り書きのメモが挟まっていたのでそれを読んでたんですよ」

「メモ？」

「これです」

ぺらっとした紙を受け取ったヴィセは目を走らせると、「なんだこれは」と顔をしかめた。

「……自然災害には関わるなという感じですかね。もう、避けようとしても避けられないのが自然災害ですから諦めろと……」

自然災害ことヴィセは紙から視線を逸らさない。
どうしたのかとリーシアがヴィセの表情を伺う。

「????」

なんともいえない表情である。

そして

なにも言わずに出て行く。

メモを掴んだまま、である。

「??????」

リーシアはぽつんと残された。

手元にはレフの日記だけである。

「父上、これはどういう事だ？ 説明してもらおうぞ！」

「ん？……ああ、事実だね」

「魔王退治なんて羨ましい。狡いぞ」

「タコ焼きを食べに行っている間に、だったかな。実験でレフがさらわれてね。頭にきて、元を断ったんだよ」

「魔王討伐なんて勇者の任務、必須概要じゃないか」

「うん、僕も若かったんだ」

「くっ！……過去に行く魔法でも研究するか？」

「ん？ ヴィーはリーシアを置いて過去に行くの？」

「……それは出来んな」

「なら、やめといたほうがいいね」

「そうだな」

「うん。君はまず、君なりの良い王になったらいいよ」

「良い王より、良い夫になる方が難しいだろうな」

「まあ、好きにしたらいいよ」

この親子は話しを互いに通じているのか分からない会話をするらしい。

「今日は平和、ですね」

リーシアはそしてページをめくる。

だが、しかし、リーシアの平和は帰ってきたヴィセによって終わりを迎える。

「よし、リーシア、結婚するぞ！」

「しないよー！！」

「俺は良い夫になると思うぞ、よく仕事をするし浮気もしない」

「仕事をするのは当然ですよ。為政者なんですから。仕事しないと、国民が迷惑です。」

ですが、貴方の取り柄はそれだけです」

「他にもあるぞ」

「なんですか？」

「顔」

「……………認めますが、躊躇うことなくそれを挙げますか。なん
かいろいろな感じですね」

27 (後書き)

草稿を直すのに時間がかかりました。

「やあ、僕もお茶まざっていいかな？」

夕飯を作りに行ったヴィセと入れ違いに、ゼロが姿をあらわした。

「どうぞ」

と笑顔で答えれば、ライが椅子をひいた。

一瞬、ゼロの目が細められる。

「はい。君はコレ」

「は？」

ばさり、と音をたてて分厚い書類がライの手に渡される。

「じゃあ、頑張ってるね」

「――マジで？」

「うん、マジで」

夕飯を作っている魔王の仕事は、こうしてライに渡された。

ライがしょんぼりで行ってしまおうと、優雅にゼロはお茶を飲み始める。

「君、帰るの諦めたの？」

「諦めてはいけません。ただ、今は、焦って帰ることでもないって思ってます。でも、アレに言ってしまうと調子に乗ってしまいそうです…。内緒にしてください」

召喚された魔界。

慣れてしまえば、それほど悪くはない。

待遇もいいし、御飯も一部の釈然としないことを黙殺すれば美味しい。何より、平和だ。

住めば都、とはよくいったもので確かに多少の違和感に目をつむれば概ね良い所である。

「理不尽の後に理不尽で、気が立っていたんですよ」思い出してみると、些か冷静さを欠いていた。

「暫くは、滞在するつもりです。調べ物も途中ですし」

「何を調べてるの？」

「歴史……じゃないですね。ただ、過去を知りたいんです」

「過去？」

「私的なことです。数年間の記憶が飛んでしまっているんです、私。それが大事な、こと、だった……ような」

「たった数年間のことを？ずっと？そうまでして探すほど大事なことなのか？」

国につくでもなく、誰かと生きる選択をするでもなく、それ以外の執着を持たない。リーシアにとっては、探す行為が生きる理由となってしまうっている。

——それ以外に目的がない。

ただ、探し出さなくてはならない。

「わたしは、それ以外に生きる目的がないんです」

焦燥。

諦観。

「——私は、人為的に造られた変質なんです……」

その技術は昔、天界からもたらされたものである。

強大な力を人は望み、結果として、魔女が誕生した。

人間の定義から外れた魔女、それがリーシアだ。

リーシアが望み、そうなったわけではない。出来ることならば、人として生きてみたかった。

「私には生きている実感が……。目的を失えば、存在する意味を失ってしまう」

焦点の合わなくなったリーシアは迷子になった子供のようにだ。

そんな彼女に、

「うん、僕は君の求めている答えを与えられない。

外の世界を見ようとしていない子供に、手を差し延べるほど暇じゃないからね」

突き放すようにゼロは言う。

生きる意味とは何か。

答えは個々によっ違うはずだ。

だから、ゼロは自身の価値観をリーシアには押し付けない。

そんな押し付けに意味はない。

「その結果、君が世界を滅ぼしたとしても僕は咎めたりしないだろう」

与えられている理由。

剥奪された意味。

うちに秘める絶望。

世界。

29 兄は行方不明

「兄がいたんですか」

平和な午後は、そうやって過ごされる。

愚痴を延々と聞かされていたゼロは、嫌な顔を一切せずにリーシアに付き合っていた。

どこからか脱線した会話は、もう一人居た魔王になるはずだった男、ヴィセの兄の話になった。

話を聞けば聞くほど、兄とやらは常識を携えており残念な弟との差を思い知らされる。

「成る程、下の子だから甘やかされてあんなだったんですね」

「いや、あれは……。本来はもう少しまともに会話できるはずだよ。もう、いい歳になっているからね、ヴィーも」

甘やかした覚えはないんだけどね、とゼロは嘆息する。

ではなんなのだというのかとリーシアは考えるが、夜にあった時のヴィセを思い出し、頭をふる。

数度まともだったからといって、彼がまともであるわけではない。なんたって初対面の相手に結婚を申し込むくらいの男だ。まともであるわけがない。

しかも、中身が伴っていない空虚ときている。

結婚の意味を知っているのかさえ怪しい。いや、知ってはいるのだろう。そこに心が伴っていないだけで。

成る程、そう考えると『王様』らしい。心を伴わない結婚とは。政略結婚が当たり前の人間界の王族、貴族のようではないか。

「で、その兄とやらは何処へ消えたのですか？」

強引に思考を切り替えるリーシア。

居なくなれば魔王であったわけで、その兄とやらがいれば、リーシアの置かれている状況も違ったはずである。そう考えると複雑な感じではあるが、こうなると予測して消えたわけではないだろ

う。彼を恨むつもりは毛頭ない。

だが、もし、を考えるのであれば本当に惜しい。過ぎ去った過去に『もし』『だったら』などということは意味を為さない。分かっていても、人は考える。

仕方がないことだろう。

「分からないんだよ。多分、確認されていない…在ると仮定しての『第四界』だろうね」

「…：第四界ですか。また、途方の無い話ですね」

天界、魔界、人間界とは第一界が第三界を蔑み、第二界を効率良く『支配』するために付けた呼び名である。

あくまでも、第三界を『悪』としておきたい第一界らしい行為ではあると、ゼロは思う。

第一界を天界。

第二界を人間界。

第三界を魔界。

第三界の住民が自らの界を魔界と呼ぶのは、ただ単に魔王の治める世界の略である。ちなみに魔王は魔力の王様のことで、世界征服を目論む悪の魔王とかではない。第二界には悪で定着しているが。

確認されているのはその一から三界であり、第四界はあるのではないかという憶測の域を越えない。

「在ると思うよ。いや、なければならぬ。厳密な『死』がないあの子が感じられないのは、そうでなければおかしいから…」

「…：？『死』がない？」

生き物は死ぬ。

必ず…。

世界だって『死』ぬのだ。

「うん、何て言うのかな。輪廻転生魔法。あの子の十八番だったよ」

「それ、魔力量が半端ない禁術指定魔法ですよ。こっちでは普通に使えるのですか？」

第二界のとある国の国王がそれを発動し、国が滅んだという。原因

は魔力の不足による暴走。

理論だけが完成しているが、発動は不可能だと思っていた。
魔女であるリーシアにはかろうじて可能だろうが、なにぶん構成が複雑すぎて面倒なことこの上ない。やろうとすら思わない。

「僕にも無理だよ。僕は力が劣化していて、魔力が散じてしまう。
あの子は特殊だよ」

やはり簡単ではないらしい。

「…凄い人だったんですね」

出来ることならば、会って話しを試みたかった。

行方不明の魔王の兄。

彼が何処へ何をしに消えたのはまた別の話である。

魔女と魔王の発端 1（前書き）

彼女の理由

魔女と魔王の発端 1

「フハハハハ！人間どもよ、我にひざまずくがいい！」

第三界国王陛下、通称『魔王』。美しい容姿と美声。圧倒的な力を有する存在として、第二界から恐れられ、忌まれていた。

「刃向かう者は殺してしまえ！」

だとしても実際の話、第二界の人間は真実魔王がどんなものなのかを知らない。第一界より齎された教え『聖書』に絶対悪として描かれているだけである。

「おのれっ魔王！我は勇者アルフリード！貴様を倒す！」

過去三度、魔王が第二界へと現出したと記録されるが魔王自身は第二界をどうこうした記録はないのである。初代勇者アルフリードは現出した魔王と戦い勝利を収めたと言われているが、魔王が勇者に攻撃をすることはなく無血での勝利であった。激しい戦闘の末の勝利であったと言われるのは、誇張され脚色されたものである。

「はんっ、貴様に我が倒せるのか？所詮羽虫ごとき脆弱な人間が！」
過去三度のうち、二度は先代魔王の所業であり現魔王は関与してはいない。残りの一度はそれ以前の魔王のものである。かといって現魔王のヴィセが第二界を訪れたことがないのかと問うたれば答えは否。彼はたびたび放逐され訪れていた。

「くらえっ！勇者マル秘奥義ソウルクラッシュ！」

「ぐああ！馬鹿な！こんなカスに！我が！？」

そもそもだ。先代の二度にわたる第二界来訪の発端は第二界の人間が研究と評し魔物を作っていたからであり、その為に生じた世界の歪みを正そうとして先代が立ち回ったという実に素晴らしい理由である。原因となった人間達は結局その研究も失敗し、全てを魔王のせいだと罪をなすりつけた。

まったくをもつて納得がいかない！

ライは眉間に皺を寄せたまま舞台の勇者を睨みつける。勇者は国に

帰り、王女と結婚というハッピーエンドを迎える。

しかし、ライは知っている。その後の物語を。

勇者という力を国に取り込んだその国は次第にその力を恐れるようになるのだ。目の当たりにした力は想像を超えていた。勇者という知名度と力、人々への影響力は国王にとって恐ろしい存在だったに違いない。

第一子誕生後、アルフリードは妻共々謀殺されることとなる。勇者一族は国に管理され、家畜のように飼われることになる。数を殖やさないように細々と血を繋ぎながら時代を越えてきた。一族は総じて早死にだったという。その死因も不可思議なものが多い。国の手にかかり殺されたのだろう。それでも勇者一族が生かされたのは第三界の存在があったからであろう。第三界が動いた時、勇者という象徴が必要となるからだ。

魔王に対抗するための切り札として。

だが、その切り札は既に失われている。

「……陛下、そろそろ笑うのやめねえか？」

「いや、すまん……ぶふうっ、……くっ」

ライの隣で腹を抱えて大爆笑している魔王陛下。

「いや、いつ見ても笑えるな。あれのモデルが父上だとは」

「勇者アルフリードも陛下のご先祖だかな」

「御蔭で俺が第二界にきてもばれないからな。助かる」

彼は第二界の魔王探知に引っ掛からない。理由はその血の中に勇者の血が流れているからである。

勇者一族の母を持ち、先代魔王の父を持つヴィセ。

それが、勇者と魔王の物語の結末である。

しかし、それが別の悲劇の始まりではあったのだ。

魔女と魔王の発端 2

勇者が魔王と共に消えてから、人間界は緩やかに滅びへと進んでいた。

勇者は希望、力の象徴である。

誰かが言った。

勇者を作ればいい。

『界』の寿命。世界がそこにある存在を認識出来なくなることから始まる。

認識できないものは、在る意味を成さない。概念を剥奪された存在は無いものとされる。それが、『消失』。

魔法素というのは、消失によって発生する世界の欠片だといわれている。その中には大地や空、人の体や魂も含まれる。

しかし、魔法素は『毒』だったのだ。

勇者を人工的に作る研究は、失敗が続いた。

過剰な魔法素を与えると、人体は耐え切れずに大半が死亡する。耐えたとしても、異形化するか精神を害する。

成功しない実験は続く。

国から、一人の女が送られてきたのはそんな時である。

女は身籠っていた。

生まれ落ちた赤ん坊は、唯一の成功例として育成されることになった。

研究施設が国もろとも消え失せ、魔女が誕生したのはその十六年後となる。

勇者として生きることを選択しなかったのである。

そして時はたつ――

森深くに住むという魔女に、とある王国から城に来訪するようにと命令が届いた。普段ならば、魔女は無視を決め込んで終わっただろ

うがその日は違った。

何を思ったかは分からないが（気まぐれというのが近いだろう）、魔女はそれに応じ公の場に姿をあらわした。

「魔女さん、ここに来る前に呪いかけてきたの覚えてるか？」

はてと記憶を掘り出したリーシアは「ああ、そんなこともありましたね」と返事をする。

「それが、どうしました？」

魔女の怒りを買うのがいけないのだ。自然災害と思って諦めろと言われている魔王と違い、手を出さなければ魔女は何もしないのだから。

「いや、どんな呪いかな？」

「……男としての機能を封じました。女を抱けないです。あれが役立つ日は来ないでしょう。王は子を残せません。」

しかし、王というのは血で残すものではなく、その思想であり在り方ですから別に良いでしょう」

……………。

それを聞いたライは、前屈みになったそうなの。

以降、城内の男性衆はリーシアの前では身構えるようになる。

「最悪の呪いですよ、陛下。気をつけてください」

「むう、困るな。確かに」

「ただでさえ、出生率が

だだ下がりしている国です。念のために解呪を聞き出しましょう」

「…結婚生活に害有りだしな。早急にな」

「了解です、陛下」

魔法素の毒は魔界では、不妊へと繋がっているのだ。

「リーシア様、この書類にサインをお願いします」

レフがすつと出した紙。真面目なレフになんだと思いつながらも、自身の名を書きかけリーシアは停止した。

仰々しく題された文字は『婚姻届』。

(……………)

そして、何も言わず紙は灰と化した。

「チッ」

柱の陰。リーシアの死角から舌打ちの音が静寂している部屋に響いた。

リーシアがレフの表情を伺えば、青ざめており目が泳いでいる。

「何のつもりか、アレに確認します。貴方は安心して、仕事に戻って下さい」

少しでも、安心させようとリーシアは笑みを浮かべる。だが、レフは逆に恐怖する。

なんとか一礼し、リーシアの前から去ることに成功はしたレフだったが

「笑顔コワイ。笑顔コワイー」

ぶつぶつと、呟きながら部屋を後にしたという。

「さて、出てきなさい。何のつもりですか？ 上司に逆らえない部下を利用するのは止めなさい。憐れです」

「ちょっとしたお茶目だ」

そう言って、リーシアの真横に座るのは魔王ヴィセである。

「貴方のお茶目は部下を死地に送ることですか？ 少し間違ってた、レフごと灰にしていましたよ」

九死に一生を得ることにレフは成功していたらしい。面白半分で加担していたのならば、リーシアは間違いなくレフを消していた。

「気長にいくんじゃなかったんですか？」

「気長だぞ？　それなりにな。これで成功したなら、運がいいくらいだったしな」

成功するとは元から思っていないらしい。

「で、どうしたんですか？」

「いや、どうもしない。顔を見に來ただけだ。さっきのお茶目はそのついでだ」

「……そうですか」

「失われた記憶は見つかりそうか？」

「いいえ」

「諦めるか？」

「いいえ、できません」

「そうか」

長い間リーシアはそうして生きてきた。目的は生きる意味となってしまうている。

「目的を果たしたら、お前はもうするんだ？」

目的が生きる意味。では、目的がなくなってしまったら？

リーシアは答えられない。

失われた三年を取り戻した後の自分は、どうなるのだろう。

その三年が、今の価値観を変えてしまったら。

その自分は、自分なのだろうか。

リーシアは答えられなかった。

「よし、ライ！　オペレーションBだ」

「おっし！」

「（…何処から現れたんですか）」

「第二作戦！」

「（作戦名くらい、統一してください）」

『ぼふん』。

音と共に、ヴィセの両手には溢れんばかりの花束が。

「…キレイ、です」

「魔界原産の催眠効果のある花だ」

「(……………」

「おうわ!!　　魔女さんストップ!　　陛下に引火しとる!!!!」

「知りません」

「ライ、着替えを用意しとけ」

……………魔王、裸となる。

「なんで、服だけしか焼けないんですか」

「魔王だからだな」

最近、リーシアの目覚めがとても良い。

夜、夢をみないほどぐっすりと寝れているせいだろう。

繰り返されていた悪夢。あの夜以降、ぱったりとみなくなった。

「陛下がなんかしたんだろう」

「そんな事可能なんですか？」

ライがうん？と軽く考える。

「出来そうじゃねえか？ だって魔王だし」

「非常識な。どんどん化け物じみてきてる気がします。気持ち悪いですよ、なんか」

「きもっ！ 本人の前では言わんでくれよ。気持ち悪いは、いかに陛下でも傷つく」

「傷つく心なんて持ち合わせているんですか？」

「たぶん、持ってる。……と、信じてえが。言われてみると自信がねえ」

同時刻。

ピーーン！

「……………」

「陛下、手が止まっています。動かして下さい。仕事が減りません」

「レフ！」

「はい、陛下」

「ライ、減給」

「了解です。陛下」

一瞬にして顔色が青ざめてしまったライにリーシアは近づく。

「どうしました？ ライ？」

「いや、なんか。なんつーか寒気が」

今の会話に気分が悪くなる内容でもあったろうか。

「風邪ですか？」

リーシアが手をライの額にあてる。

距離が近い。

「熱は無いですが…」

「いや、風邪じゃあねえと思うが。病気なんぞ、ここ数百年になってねえし」

「そうですか。でも、無理は禁物ですよ」

「わーってる」

同時刻。

「……………むう」

「陛下、手を止めないようにしてください」

「レフ！」

「はい、陛下」

「ライにこの仕事まわしとけ」

「了解です。陛下」

いったい、ライに何が起きているのだろう。

「…本当に大丈夫なんですか？ 死んだ人みたいな顔色になってますが」

「いや、大丈夫だ。身の危険が迫ってきてるだけだ。きっと…」
青かった顔色が、白くなっている。

「身の危険って」

城の中ですが？

まあ、確かに。安全とはいえない場所ではある。

自然災害が闊歩しているのだ。どこでなにが起きても、おかしくない。

そして、自然災害で誘発され『魔女』が状況を悪化させてしまう。魔女リーシアが、魔界にきてから今日まで死人が出ていないことが奇跡である。

「陛下のお供として、第二…人間界に送り込まれた時並に嫌いな感じが…」

「それは、確かに。最悪です」
想像つかない程の悪夢だ。

「そうだ。最悪だった。陛下…当時殿下だが、初っ端から文無しで剣一本持たされて砂漠にぽんと放り出されるわで『阿呆かー！』って叫んだりな。したら、『暑い』一言で砂漠に雪を降らし始めんし。人間界に居るときは、自重しろって言われてんのに守りゃあしねえんだ。もう、最悪だった」

「それは、お疲れ様です」

同時刻。

「レフ…」

「はい、陛下」

「今度の花祭りで余興でライの裸踊りをプログラムに突っ込んどけ」
「（みたくないですが…）了解です。陛下」

レフはツッコミを入れない。入れたら負け（ターゲットが自分に變更される）だからだ。

「……最近、仕事量が増えた上に危険なんばかりで、しかもだ。給料が異様に下がってんだが」

「ライは失言が多いですから」

「いやいや！　そんなで死ぬような仕事ばっかなんはちよっとキツイ！」

「ちよっと、ならまだ大丈夫ですね。仕事、追加しましょうか。これなんかどうです？　ドラゴンの保護。単独で」

「無理ゆーな！　レフ！　今は産卵期だ。一番気が立つ時期だっつーの！」

「だから、じゃないですか。餌になれますよ？　肉体が消滅されれば私達だって死ねます」

「まだ、死ねんわ！」

「知ってます」

「……………レフ、もしかしてイライラしてますか？　なにかあったんです？」

二人の会話を黙って聞いていたリーシア。今日は魔王が朝から現れない。だが、レフがイライラしている。

せっかくのお茶会だというのに、楽しめないのはよろしくない。いったい何が原因かと……。

「ええ。リーシア様、しかし原因なんて問うまでもないでしょう？」

「……アレですか」

「はい」

「んだあ？　レフ、陛下の無茶ぶりなんていつもじゃねえか」

「わかってますよ、ライ。だから、八つ当たりです。貴方の仕事の割り当ては確かに私の八つ当たり結果ですが」

「だろーな。陛下なら恥辱に塗れたもんを命ずるかな」

（……最低ですね）

「しかし、減給に関しては私に権限が無いので陛下に進言なさい」

「それが、出来たらやっとなる！」

「知ってます。いいじゃないですか、減給くらい。溜め込んでるんですから。溜め込んでることくらい知ってるんですよ？独身貴族のライがどれだけ優雅な生活してるのかくらい。しかも、城暮し。もともと、ここがお家ですしね。それに仕事量なら私、負けてませんよ。お陰で私、最近家に帰れてないんですから。私には家に最愛の娘がいるんですよ？帰りを待つ家族がいるんです。娘のために屋敷を建てて暖かい家庭を作ろうと。なのに、陛下は私を帰らせてくれない。仕方なく娘を城に連れて来てみれば、私より陛下に懐くときた。やってられませんよ。そのうえ今日なんか、私の娘を連れて何処か行ってしまうわ。しかも、まだ戻って来られない。私の娘を返してください！誘拐ですよ！」

（スイッチが入ってしまったようです！）

（レフ、時々なるんだ。長いぞ、こっから）

こそこそ会話する二人。だが、レフは止まらない。

「聞いてますか！二人とも！」

「……はい」

まだ先は長そうだ。

「何やら誘拐犯扱いされてるな」

「へーかゆーかいしたの？」

「してないぞ。菓子を作りにつただけだ」

「うん。ケーキ喜んでくれるかな」

「共に作ったんだ。喜ぶに決まってる。……にしても、いつ入り込めばいいんだ？」

「父上こわいね」

「レフ、プログラムに俺の裸踊りがあるんだが…」

もうすぐ行われる花祭り。何故か催し物の一つとしてライの裸踊りが組み込まれている。

「はい、頑張ってください。陛下直々の御命令なので、きっちりこなしてください」

「……………（負けるな、俺）……………いや、祭り最中にも仕事あんだが」

「見回りくらいでしょう。それくらいならば、部下に任せても大丈夫でしょう。リーシア様については、当日は私か陛下が伴いますから。陛下の護衛は私が担当することになっていますので、その点についてでもご心配なく。」

と、いう訳です。ライ、貴方の手は十二分に空く筈です。これ（裸踊り）も、陛下の御命令な以上、仕事と割り切ってください。不発しても骨は拾って差し上げますから、安心して踊ってください」

「レフ、俺を売ったな」

「何を失礼な。保身の為に貴方を庇わなかっただけです。庇ったら最後、私が裸踊りになってしまいますから」

裸は御免ですと、きっぱり拒否するレフ。

いやいや、ライだって御免被りたい。

そもそも、花祭りは（本来の意味は違うのだが）愛の告白をする祭りである。その祭りで、すっぽんぽん。場違いにも程がある。阿呆なノリの飲み会ではあるまいし…。

「ライ、話しは以上ですか？　祭り前で忙しいので、部屋から出て行ってもらえますか？」

「いや、レフ？　お前、今日も機嫌悪い？　——つか、陛下今日もいねえの？」

地雷。

一瞬にして部屋の温度が下がる。

レフから白い冷気が噴出している。

昨日は、陛下がレフの娘を連れていなかったために機嫌が悪かったのだ。しかしその後、娘に手作りお菓子を貰い最高潮にテンションが上がっていた。テンションが上がりすぎて魔法も暴走した為、一室大破したワケで物凄く迷惑した。

今はという窓が凍りつき、白い息が部屋の寒さを物語っている。やばい。

逃げようと、扉に手をかける。

開かない。

そろりと見ると、凍っている。

マズイ。

ノブの金属に手がくっついている。…無理に剥がせば、皮と肉がベリッと。そこまで想像して頭を振る。

「ライ、何処へ行くんですか？」

「いや、出てけっつうから…」

「……………」

「（いや、沈黙こえーよ。いつものスイッチならスイッチにしておけよ！なんで、沈黙なんだよ！陛下、何したんだよ！）」

更に下がり続ける室温。

「……………」

数時間後、発見されたライは凍傷で危険な状態だったという。

発見者となった魔王は、黙って花祭りのプログラムからライの裸踊りを削除したという。

平和な日々。

こんな日が、毎日続けばいい。

「……って思える生活をしたいんですが、陛下」

レフの嘆願は聞き入れられることは少ない。

「何言ってるんだ？」

平和だろう。戦争も、大規模な内乱も無ければ、疫病なんかも起こさせていないだろう。何が不満だ、贅沢だな」

「……いま、まさに、戦場、です。未裁決の書類が山のよう、です」

「仕方がないだろう。祭り前だ。催しは全力を挙げるに限る。あらゆる事態に対処できるようにしていなければ、俺が遊べないだろう？」

「なんて、俺サマですか！」

「俺という俺サマだな」

はつきり言われて、レフは言葉を失う。

親の顔が見てみたいと、在り来りなことを考えてみれども、その顔は自分もよく知る親友とも呼べる人間のものなわけで。

もつと言ってしまったえば、教育係は自分とライである。

教育方針を間違えたのだろうか。

「レフ、お前の方針は間違っていないぞ。それが無ければ、今の俺はないんだからな。」

今の俺が在ること、感謝している」

「へ……陛下……」

不意打ちだ。

涙で潤む目尻を拭うと、レフは頭を下げる。

「頭なんぞ下げるな、気持ち悪い。レフ、笑え。んで、仕事をしろ

！」

減らない書類に隠れるように机に向かう魔王陛下。

戦場のような追い込みの中ではあるが、レフはひっそりと願う。

こんな日が、明日も来ればいいのにと。

「いや、レフ！　願うな、そんなもん。明日もこの書類の山を相手にしたくないぞ、俺は。」

今日中に終うぞ、この山！」

「了解です、陛下」

地の文にまでツツコミを入れられてしまったが、それもまた、かけがえのない日常の一コマである。

「祭りは、リーシアと回るつもりでいるからな」

「！！！」

「顔色悪いぞ、魔女さん。なんか、したかあ？」

「いえ、悪寒がしたものですから」

「風邪か？　祭りが近いかな、無理をしないで休んだらどうだ？」

「あー、いえ。アレに連れ回されそうですからね、反って体調でも崩していたほうが楽でいいのかもしれないかもしれません。」

それに、私、花祭り苦手ですし」

「…陛下の八つ当たりが目にかぶ」

「…実際に起きる八つ当たりは、想像以上でしょうね」

合掌。

「……………?」

長い廊下を歩いていたリーシアは、妙なざわつきに振り返り首を傾げた。

斜め後ろを歩いていたライをちらりと見るが、彼は軽く首を横に振った。

ライも分らないらしい。

祭り前の浮かれかと思案するが、それにしても妙な空気である。この空気には覚えがある。

「……恐怖、ですね」

「陛下、か？」

「わかりません。ですが、彼でしたら、もっと阿鼻叫喚かと思うのですが…」

災害認定されている魔王。彼の起こす問題は、派手なものが多い。

「確かに。爆発音すらねえな」

そう言うと、ライは向かいから歩いてきた文官を捕まえる。

要領を得ない彼の話に、ライは顔をしかめる。

「行っているぞ」

文官は頭を下げ、そそくさと逃げて行く。

要約すれば、

「陛下が異常？」

ライの呟きにリーシアは嘆息する。

「…そんなの、いつもじゃないですか。何を今更」と、その時。

「イヤァァ」

「ひい」

段々と近づいてくるよく分からない悲鳴。

「……………阿鼻叫喚、ですか？」

「いや、それにしちゃあ爆発はない」

戦闘体勢に入る二人に、悠然と歩いてきた元凶は、

「やあ、おはよう。二人とも」

と、彼は片手を上げ爽やかに笑ってみせた。

「……で、何がどうなっているんです？」

「気持ち悪い、なんだありゃ」

驚愕と恐怖に耐えられなかったリーシアは、思わず転移し、ライを連れてその場から逃げ出した。

余程、慌てていたらしくリーシアとライが転移した先は頭上、空だった。

城の上空にフワフワと浮かぶ二人は、時々下から聞こえる悲鳴に頭を悩ませる。

「拾い食いでましたんでしょうか」

「頭を打ったとかじゃ？」

「と、いかですね。本物ですか？ アレ」

「偽物がいたという記憶は無えんだが、な」

「とりあえず、レフを呼びましょう」

「だなあ。埒が明かないしな」

レフの魔力を探索する。特徴的な魔力のそれは、割と早く見付けられた。

素早く構成を組むと、リーシアは指を弾く。

「…何か、ご用ですか？ リーシア様」

艶のない髪、青白い顔、目の下の隈が彼の疲労を物語っている。

急に呼び出され、空中に放り出されたというのに眉一つ動くことのないレフ。彼の疲弊具合は、それすら出来ない程らしい。

「……なんか、スマン」

「そう思うならば、貴方も書類仕事をしてください…。今の私を見て、罪悪感が湧くのは貴方が私に対して何らかの――」

「レフ、少しいですか？」

長くなりそうなレフの話を断ち切ると、リーシアは本題をぶつける。

が、

「陛下が爽やか？　　なんのことですか？　　ああ、ですが、ここ

数日らしくない事を口にしてましたね。

——死亡フラグ的な」

代表的な死亡フラグは、戦争中などに『俺、この戦争が終わったら結婚するんだ』や、『この戦いを生き延びたら、君に伝えたいことがある』だろう。物語りのクライマックス直前に、想いが通じ合うのも危ない。

あとは、やはりクライマックス直前にらしくないような感謝の言葉。

「はい、それですね」

「……………」

レフ、地の文に反応しないでください」

「疲れすぎていて、会話文と地の文の違いを理解していねえんだな、コイツ」

「もう、いいですか？　　仕事しなくては…。」

ちなみに私は、爽やかだろうが俺様だろうがどうでもいいです。ただ、仕事してくれれば。

それでは、リーシア様失礼します」

ゆらりと傾くレフ。

そして、落下。

真下の城へと落下していったレフは、城をぶち破る音とともに戻っていた。

「…………レフ、無事なんですかね」

「まー、落下の衝撃くらいで死ぬようなら陛下の側近は務まんだろうしな。

に、してもなー。

レフも、もう少し他人を使えば楽に生きれるんだがな。

実は陛下も忙しすぎて壊れたんじゃないかねえのかな」
間。

「無い無い」

「だよなー」

「……………うん？ 空間に歪み？ 何処かに綻びが発生してるのかな。」

まあ、十中八九原因はヴィーだろうけれど」

纏わり付く湿度と、かび臭さに不快になりながらも、目的は達成した。早々に脱出したいところだが、空間が歪んでいては転移しにくい。

「…仕方ないか」

彼は諦め、来た道を戻りはじめる。無理な転移は、何処に弾かれるか分からない。弾かれた際に、肉体と魂が分離することだって有り得る。……試したことは無いが、その現象を実際見たことはある。あれには、彼もさすがに驚いた。

機能停止した遺跡には、もう危険はないだろうが入り口は封印しておこうかと、彼は思考して歩みをとめる。

——ジジッ。砂嵐、ノイズだ。

一瞬、自身も存在が希薄ななっていたのだろう。思考していた内容が飛んだ。

「うん。これは、少しマズいかな」

焦ったようにも思えない平坦な口調で呟くと、やは焦ったようにも思えない足取りで、彼は遺跡を後にする。入り口は潰しておいた。

「昼飯って片手で食えるものを持っていた女官に様子を聞いてきた」

「…どうでした？」

『ああ、有り難う。そうだ、リーシアに言付け頼めるかな。』

ああ、そう。そのリーシアだ。

夕食までにはめどがつくから、夜は一緒に食べよう。ああ、頼むよ』

「――だと」

「……………砂吐きそうです」

「同意する。なんつーか、口調まで違うっていうのが恐怖だよな。今、中の人が別人って言われたら、信じてしまう」

ぞわぞわとした不快感。見ればライも鳥肌である。

「あの状態の方が、平和といえば平和なんですけどね。気色悪くて一緒にご飯を食べる気になりませんよ」

「同意する」

「本当に思い当たる節、ないんですか？ 貴方、側近でしょう？」

沈黙。

常から静かな図書室といえども、訪れる人がいないわけではない。

リーシアとライの他にも利用する人間は多い。

だというのに、今はきぬ擦れの音一つもない。

返答を待つような静寂。

そして、

「――言えない」

一言。

「…そう、ですか」

彼等が、何かを隠していることにリーシアは気付いている。だが、リーシアは彼女自身の目的を妨げない限り追及する気もない。

他に関心を持たず、情を持たず、目的だけを追うこと。それだけのことだ。

それだけな、はずなのだ。

揺らぎ。

目的は自身の失われた記憶を取り戻すこと。

その記憶は、世界から失われた国と三年の記録と関係していること。揺らぐ。

リーシアは思考したことを霧散させる。

あつてはならない。

既に満たされているなどとは。

「……煩わしい。いっそのこと原因を排除してしまいたいですね」

「それは、困る。魔女さんが陛下を害そうとした場合、俺は殺してでも止めねえといけねえからな。一応、立場としては…」

「それは、私も困ります。貴方を殺したいとは思ってませんし、接近戦は私、得意ではないので」

「ハハハ」

「ウフフ」

微妙な空気が二人の間に流れる。

やばいと感じたのだろう。既に図書室には二人しかいない。皆、逃げた。

36 (後書き)

時系列無視した小咄は、活動報告の方に 度々出現してますので。

——ザザッ

鈍っていた思考が瞬間的に鋭くなる。

失念していた。

初めてのことだったのだ。

結果が、どうなるかなど予測不能だった。

だとしても。

これは、自分の落ち度だ。

「レフ、キリがいいところで休憩を入れろ。というか、仮眠をしてこい。顔色が青白い……いや、色がないな。気色悪い」

声を掛けられ顔を上げれば、陛下がこちらを見ている。

「し、しかしながら陛下」

「寝ろ」

力の籠った言葉。

反論を許さない命令。

急激に失われていく視界の中の陛下は、砂嵐の中にでもいるようだった。

——断線する。

自分という意識が向こう側から切り離される。

こんなにも介入が難しいことだとは。

疲労。

疲れている。

独り。

自分。

狂ってしまう。

いや、もう、狂っている。

「うん、臨戦体勢のところ悪いとは思っているけれども、いいかな」

冷氣立ち込める中、現れたのはゼロだ。

「あまり魔力の垂れ流しをしないように。この部屋は対策をしているけどね。君達二人の魔力は抑えきれないだろうからね。もし、暴走してしまったらここにある貴重な資料が失われてしまう」
更に室温を下げる。

ゼロの魔力は微動だにもしていないというのに、一言一言にびりびりと痛みを感じる。

流石、前魔王様。威圧感が半端ない。

「す、すみません」

「スマン」

「うん、気をつけて」一瞬にして、威圧感がなくなるのも『流石』である。

「出先で異変があったから、城に来てみたんだ。でも、出先の異変がたいしたことないようなくらいだね、城内大混乱だ」

「出先、ですか？」

普段何処行っているのかリーシアは知らない。普段から城に滞在していてくれば多少、平和な生活が送れるだろう。

それを考えると、次回からはゼロのお出かけ先をチェックしておいても良いのかもしれない。

「ああ、今回は遺跡潰しだよ。2、3潰してきたから報告書は後でまとめて出しておくよ。興味あるなら、レフに後日見せてもらおうといいよ」

（遺跡？ 流石、親子。貴重な魔法遺跡を潰してしまいますか）

「放置は危険だからね。仕方ないよ」

○は心情吐露なのだが。ライは、

（俺はツツコまんぞ）

決意。

ツツコミをすると脱線する。そして、体力を消費する。精神力も削られる。

「…で、陛下を治す方法はあるのか？」

「アレ、うつりませんよね？」

遂に病気扱いである。

「うつるかもしれない」

ボソりと呟かれたゼロの言葉は二人に恐怖を与えるのに充分なものであった。

「元凶を治せば元通りだろうけど」

「…間を空けないでそれを言うてくださいよ」

「あー、一瞬真っ白になっちゃった」

「うん、僕の言葉が足りなかった」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7876q/>

魔王、結婚します

2011年8月15日07時41分発行